
1 or 0

斎藤

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1 o r o

【Nコード】

N 8 8 5 7 X

【作者名】

斎藤

【あらすじ】

「お帰りなさい私の可愛い娘!」「よくぞ帰った我が娘よ!」「は?」

芹沢依せりざわより。18歳。人間。もう一度言っ。「人間」。魔王夫婦の子供ではない。断じて。

テンプレ展開で呼ばれた勇者の筈の主人公は、行方不明だった魔王の一人娘でした。それどんな展開だよ。

「魔族め、よりもよって勇者様のふりをするとは何たることだ！ 我々を油断させ、皆殺しにする腹積もりであつたのだらう！？」

「これは召喚魔術だぞ！？ 一体どうやって勇者様と入れ替わつたというのだ！ 怪しげな魔術を使いおつて！」

「ええい、とにかく早くこの魔族めをひっ捕らえよ！ 魔力を封じるのを忘れるな！」

「何と狡猾な……くそ、魔族め！ 汚い手を使う……！！」

一体何だというのだ、こいつらは。

人を突然拘束して、騒ぎ出して。お前らに突然責め立てられるような覚えはない。大体魔族だの勇者だのと、何を口走っているのだらう。猿轡さえされていなければ、どんな夢物語の住人だよと言って罵ってやりたい。

「どうやったかは知らぬが、魔王の命で我が王の命を狙ってきたのだらう、魔族めが。しかしこうして捕らえられた以上、それは叶わぬものと知れ！ 明日、国民の前で、貴様は公開処刑とする！ せいぜい短い生を謳歌するが良いわ！」

いや、どちらかと言えばお前のその言い草の方がよっぽど魔族っぽいつていうか、悪役っぽいっていうかさ。

そんな私の胸中のツツコミを知ることなく、小さくてでっぷりとした貴族っぽい……いや、それよりもなんかこう、宰相的な大臣的な、王様には一步届かない的な雰囲気のおっさんは、鉄格子越しにそう吐き捨てて、牢屋らしいこの場所を去って行った。猿轡に拘束具（ご丁寧に全て金属製）という、どう見ても囚人です本当にありがとうございますみたいな状態の私を残して。

「（……どうしてこうなった）」

私は混乱以上に怒りを抱えながらも、灯りの一つも無い、真っ暗で冷たい石造りの牢屋で、ぼんやりとこうなった経緯を振り返ってみた。

まず、魔族魔族と連呼されていた私だが、魔族とやらになった覚えはこれっぽちも無い。私は真正銘のホモサピエンス、つい1時間前までは普通に女子高生をしていた、芹沢依よるという日本人だ。小さい頃のあだ名は「よっちゃん」。イカか。

18年の人生を振り返れば、ラノベの主人公だとかイギリスの某有名魔法少年のように、両親と幼くして死に別れて親戚を盪回しにされたり虐待されたりという不幸な生い立ちだったとか、異常なまでに強調された平々凡々だったとか（大体自分を平凡っていう奴ほど平凡から遠いのもテンプレだ）、そういうことはない。今世紀始まって以来の天才だとか、元々特別な血筋云々だとか、物凄く可愛くて美人で人気者だとか、超絶金持ちの家だとか、あれば嬉しい厨設定も無い。どっちかというところ「変わってる」とか「おかしい」とか「病院に行け」とか言われてた、精神的に「残念」とか言われちゃいそうな方に近い（勿論、自分的には普通だったのだが、周りの評価がそんなんだったので、そう言い張るのを止めた）。

そんなテンプレ的主人公からは除外される私だが、どういうわけか下校中に突如頭上に現れた謎の魔法円によって召喚されるというなんともテンプレな異世界召喚ぽいものをしてしまったようなのである。ただ、私自身が先に話したようにテンプレ主人公の枠から外れるからなのだろうか。召喚されてからすぐ、テンプレ展開は終わりを告げた。

召喚されたあの時、私は真つ暗な部屋の中で、ぽかんとへたれこんでいた。想像してみたい、こうして振り返っている今は冷静だが、突然周りの風景が一変しているのである。これは驚愕を通り越して呆然我失もするというものだ。

私は「は？」と「え？」を繰り返し、自分を囲む魔術師としか言えないような不気味な霧のローブ軍団をきよきよと見やり、儀式真つ最中ですみたいな篝火を焚いた部屋を見回していた。周りの人達は確かこの時、「おお……！」「成功だ！」「これが勇者か！」とか言つて、何か感動していた気がする。

ここまでなら素敵なテンプレ展開。これから王子なり姫なり王なり大臣なりが召喚された私に「おお勇者よ」みたいな風に近寄ってくるか、自分の身に起きたことに混乱して周りに説明を求めるのが王道なのだが、問題はここからだ。

何とか我に返った私は後者を無意識に選択し、説明を求めて口を開きかけたのだが、何とその瞬間、突然どこから防犯ブザーのような騒音が鳴り響いて、どう見ても緊急事態みたいな赤い光が、部屋の隅っこに置かれていた水晶玉っぽい物から放たれたのである。

それからは大混乱。私が口を挟む隙などなく、「魔族の反応だ！」

「どこに侵入したというのだ魔族め！」「今すぐ全員素顔を見せろ！」とか周りが騒ぎだして、でも私は何が何だか分からず呆けていて、そして3分くらい経った時には、この場の全員が私を凝視していた。その意味は「もしかして、こいつじゃないか？」である。そしてそれは外れておらず、誰かが私の腕を掴んで何かぶつぶつ言ったと思うと、「こいつの魔力は黒魔力だ！魔族はこいつだ！」と大声で言つてきやがったのである。鼓膜破れるかと思った。

で、後は魔族うんたらと散々詰られ、猿轡と手枷・足枷を嵌められて牢屋にポイ。素敵な囚人スタイルの出来上がりだ。

「（……理不尽！）」

怒りが湧き上がった私は、思わず手枷を床に叩き付けた。別にたかがこの程度でこれが壊れるとは思っていないが、やはり手枷は金属特有の甲高い音を立て、衝撃に震えただけだった。腕も痺れて痛いし痒い。畜生。

ていうか何だよ。私どう見ても可哀想なだけじゃん。被害者じゃん。勇者召喚って基本的に勇者の人権とか総無視していきなり呼びつけて魔王倒せっていうのが王道だけどさ、私その勇者ですらないってどういうこと。かといって事故でもなく、明確にその目的で呼ばれたのにもかかわらず、いきなり魔族とかどう考えても人外呼ばわりした拳句に公開処刑？冗談じゃない！

「（あいつら絶対ただじゃおかない。でもその前にこの状況何とかしないと……）」

あのム力つく連中は絶対シメる。いや、この際異世界だし犯罪とか気にしないで絶対ぶち殺すとして、まず何をするにも、現状をどうにかしなくてはならない。それもできるだけ急いで。

何せこっちは自分がここにぶち込まれた時の時間も分からないまま、ただ明日に処刑するただけ言われているのだ。悠長に構えている時間は無いと考えていいだろう。何より、こんな理不尽な理由で死んでたまるか。

私は怒りはそのままに、何とか頭を冷静に働かせる。こんな時こそ焦っては負けだ。まずは自分自身のチェックだ。

体には特に怪我や異常は感じない。あるとすれば、ひんやりしたこの空気に体温が少し削られていることくらいだが、活動に支障をきたすには遠く及ばない。よし、逃げるのに問題は無いだろう。本当は殴り込みとかしたい気分ではあるが、私自身は一介の女子高生だ。武術の達人でも何でもない私が特攻したところで、きっと無駄死にに終わるだろう。だからとにかく、今は逃げた方が良く。臥

薪嘗胆とも言っし。

では、早速逃亡計画を練ろう。まずはこの枷だ。魔力を封じるだか何だかと言っていたが、そんなものに覚えが無いのでそれをどうこうという以前に、手足が拘束されているのは不便だ。逃げるにしても、奴らをフルボッコするにしても、手足が不自由じゃお話にならない。

とは言え、拘束具は全て金属製。枷は鎖と輪っかで出来ているのではなく、四角い板のような形状の物に穴が開いているタイプで、二枚の金属板を鍵が何かで留めているのだろ。鍵、と断言できないのは、枷が黒い上に、暗くて鍵穴が視認できないからだ。ちなみに、猿轡は円柱状の棒を横にして口に無理矢理押し込んでいる奴で、後頭部に回されたベルトのようなものでがっちり拘束してある。こっちはまだ外せなくてもいいんだけども。

何とか目を凝らし、手や顔で触って確認してみるが、手枷も足枷も、どういうわけか継ぎ目のようなものは見当たらなかった。継ぎ目があればそこに何か捻じ込んで、てこの原理で壊せたかもしれないのに……。黒魔力だのと言ってたし、何より私をここに召喚したのもあるから、多分この世界には魔法がそれに準じるものがあるって、そういうのがかけられているのかもしれない。（持っていないと思うけど）私の魔力とやらを封じる目的があるって言うてたから、何としても自力で外せないようにしてあるんだろ。くそ、どうでもいい猿轡の方がまだ外せそうでも意味無いのに。

私は早々に拘束具を壊すのを諦めて、暗闇の中、手探りで牢屋を調べた。先人のプリズンブレイクの努力の跡があれば儲けものだし、何か使えそうなものがあれば隠し持って、処刑の時にそれを使って逃走できるかもしれないからだ。

「（……ん？）」

牢屋の床の上を滑るように探索していた私の手に、ぽこりとイレギュラーな障害物がぶつかった。ぺたぺたとその周囲を確認すると、牢屋の隅の床一帯がでこぼこと盛り上がっていたのである。

この牢には窓が無い。だから多分地下牢なのだと思うが、地面を掘って脱獄されるのを防止するために、床も石造りになっている。石造りなのだから当然石一つ一つに大きさの違いがあってもいいのだが、恐らくは引き剥がされるのを防止するために高さが揃えられていて、まっ平らなのだ。そんな所にイレギュラーなでっぱり……怪しい。怪し過ぎる。

「（せいやつ）」

私は試しに床に敷かれた石を何とか一つ掴み、引っ張ってみた。すると石はほんの少しだけ抵抗して、しかしあっさりと地面から引き抜かれる。ちなみに平らな床の石を同じように引っ張ったが、こちらはびくともしない。

これは確実に怪しい！ 私は一心不乱に石を引っぺがした。すると、この牢屋の床から壁にかけて、大体１メートルくらいの範囲で穴が開いていることが判明した。まさに先人の努力の跡である。是非先人には素晴らしい脱獄生活を送っていてほしいと思った。まさか石を引っぺがして穴まで掘っているとは！

私はさっそくその穴に突入した。一瞬だけ、今まで頭からすっぽ抜けていた見張りの心配をしたが、私を捕まえて牢にぶち込んでくれた連中は、どうやら魔族、つまりこの場合は私を怖がっているようだった。きつと誰も好き好んで見張りなんてしたくないのだろうし、ここが地下牢であるなら、出入り口はあのデブが出て行った扉一つきり、そこだけを見張っていればいいのだろうから、きつとこのまま誰も来ないだろう。杞憂だった。そしてこの連中が馬鹿だというのも分かった。私が言うのもなんだけど、見張りに手を抜くなよ。こりゃあ先人のプリズンブレイクは楽勝だったろうな。

ああそうだ、さつさとおさらばしたいのは山々だけど、後の人のためにここは塞いでいかないといけない。こんなところに入れられるのは悪人だと思うけど、もしかしたら私のように冤罪とか言いがかりとかでぶち込まれる人、居るかもしれないし。それにここから出て行ったことがばれれば、追手がすぐにかかる筈だ。私は退かした石を適当に敷き詰め直してから、できるだけ足早に穴を進んだ。

「（やっぱり、動きづらいな……っ）」

制服が泥まみれになるのも厭わず、私は芋虫のように穴の中を這って進んだ。穴がほぼ垂直になっていたら、手足が不自由な私は文字通り手も足も出なかったが、幸いにしてこの穴は緩やかな傾斜で地上に伸びているらしい。脱出を急いでいるのもあり、本来なら多少なりとも感じていたであろう苦痛や疲労は、全くと言っていいほどに感じなかった。

とにかく一心不乱に穴を進んでいると、やがて地下特有のひんやりとした空気が薄れてきた。出口は近いのだろう。私は空腹の獣が肉にかぶりつくように、新鮮な空気が流れる方へと歩を進めた。

「（あと少し、もうちょっと……！）」

うつすらと穴の終わりが見える。こちらは夏なのだろうか、空気はしつとりと湿気を含み、熱を帯びている。汗と土による不快感に、熱気が追加されて全身を襲うけど、それに構っているような余裕はない。私はただただ先を目指し、必死に手足を動かし続ける。

あと3歩、2歩、1歩――

「……………っ！！」

この穴を隠していたのであろう枯葉の山を押し退けて、生温い空

気が漂う地上に飛び出す。猿轡のせいで存分にはいれないが、できる限り深く呼吸を繰り返しながら、私はその場に倒れ込んだ。

「（出られ、た……！）」

私は肩で息をしながら、ごろりとその場で仰向けになった。剥き出しの地面だが、既に土だらけなのだ。気にすることは無い。というか、気にしてられない。足早な躍動が止まない心臓を宥めつつ、私は周囲を見回した。

まず、正確な時刻は不明だが、周囲は暗い。夜だ。真上に広がる夜空の星は、プラネタリウムばりに散りばめられている。綺麗だ。あと月が7つある。驚きだ。

横目に確認すると、どうやらここは森の中か何かのようだ。周囲には木々が生い茂り、その奥に僅かに石の壁と、城らしき尖塔が見え隠れしている。あそこは城の地下牢だったのか。そういえば王の命とか言ってたな、あのデブ。成程。

「（……あんまり長居すると、まずいよな）」

息が整ってきたところで、私は上体を起こす。いくら慣れないことをした後で疲れているとは言え、このままここに居ても何も良いことは無いだろう。何せここは城の目と鼻の先で、こちらは脱獄囚。搜索が始まったら速攻捕縛されるのは目に見えている。

それに、この森に他に生き物が居るのか今は分からないが、肉食獣が居たらそれでもアウトだ。いや、ファンタジー的に考えて、モンスターの類を警戒した方が良いのか？とにかく、喰い殺されるのは御免だ。自分じゃなきゃ別にいいけどさ。

まあどの道、手枷足枷猿轡付きの私が無力なことは変わらないわけだけど、だからこそそれらに立ち向かうことよりも、それから逃げることを考えないといけない。少なくとも今は。

「（とはいえ、これじゃろくに動けないな……くそ）」

私は忌々しい拘束具を睨み、舌打ちする。地上に出たことでその姿をはつきりと確認するが、やはり思っていた通りの構造だ。黒々とした重厚な柵には、捕らえたものを決して逃がさないという不可視の意思すら宿っているように見える。しかも怒りと興奮が脱出の成功で一度冷めたため、その重さが今更ながらに押し掛かってきた。よくこんな物をぶらさげてここまで逃げられたものだ。

つい自分の火事場の馬鹿力に感心するが、そんなことをしている場合ではない。逃げなくては。柵で思うように動けなくても、とにかく少しでも遠くに逃げて、何としてでも身の安全を確保しなければならぬのだ。

何せここは私の世界ではない。先程まで晒されていた処刑の危機のように、何が起きるか分かったものではないのである。だから逃げて、息を潜めて耐え忍び、いつか私を理不尽に殺そうとした奴らをぶち殺すための力を、知恵を付けなくては。そのためにはまず、安全を第一に確保しなくてはお話にならない。全ては安全を確保してからだ。

「（そうだ、絶対にあいつらを殺すんだ）」

本当なら今頃、自宅で夕飯を食べて風呂にでも入っていただろう。まさか自分の読んでいるラノベでもあるまいし、こんな脱獄劇も命の危機も訪れていた筈が無いのだ。しかも自分たちが呼び出しておいて、理不尽な理由で殺すなんて最悪だ。勇者とかそういうポジションなら、まだそれなりの待遇をされて今よりましな考えや感情を持っていたかもしれないが、もう駄目だ。何が公開処刑だ、無実の罪で民の娯楽につき合わされるなんて冗談じゃない。

私は再び怒りが頭を沸かし始めたのを感じながら、不恰好に立ち

上がつて歩を進めた。走れなくても歩けるなら、それで行くしかない。歩けなくなったら這って行けばいい。

ただ、立ち止まっではいけない。

だが、そうやって自分を奮い立たせ、怒りを動力源に森を進んでいた私の耳に、不意にがさがたと木の葉が擦れる音が届いた。

「（誰か、いや、何かいる！？）」

まさかもう追手が？いや、危惧していたモンスターとかの肉食獣か？

一気に体温が下がった私が、その音がした方向に反射的に顔を向けると、

「…………お姉ちゃん、誰？」

小さな少女が、こちらを窺っていた。

私は目を瞬いて、目の前の少女を見つめた。

髪は黒。紺色に近いのか、月明かりの下、その長い髪は黒と紺の二色が入り混じった、落ち着いた美しい色合いを醸し出している。年齢は7に届くかどうかといったところか。私の腰くらいまでの身長少女は、私と同様にぱちちと大きな瞳を瞬かせて、こちらをじつと窺っている。その愛らしさは目を引くが、それ以上に私の意識を奪ったのは、少女の容姿だ。

少女の肌の色は、青だった。

病的な色合いの比喻ではなく、本当に青い。更に、大きな瞳の色は金色だが、白目に当たる部分が黒い。そして極めつけは、ローブのような服を破り、その背中に生えた蝙蝠のような翼だ。

「（この子、人間じゃない……！？）」

私は突然の出来事に、思わずその場に立ち尽くした。

もしかして、これが魔族だろうか。いや、きっと間違いない。これを魔族と言わずして何と言う。

どうしよう、どうすればいい？こんなのはさすがに予想外だ。相手は少女だが、人間でないならきつと見た目以上の何かを持っているのだろう。それに少女の考えが現時点では全くの不明だ。敵意の有無も分からない人外を相手に、一介の女子高生、しかも身動きが自由にできない身で、この場を一体どうやって切り抜ければいいのだ。

「お姉ちゃん、泥だらけ……どうしたの？」

「！」

はっとして目線を落とすと、少女はいつの間にか私のすぐ目の前まで来ていた。私が呆然としている間に距離を詰めていたらしい。驚いた私が思わずバランスを崩して大袈裟に尻餅をつくとき、少女は「お姉ちゃん大丈夫……？」と言い、ぺたぺたと私の体を触り始めた。

反射的に身を強張らせるが、少女は意に介することなく、私をぺたぺたと触り続ける。その様子には全く邪気が無く、眉を八の字にしているところを見ると、むしろ心配すらされているようだった。

……警戒する必要、無さそう。

私は何となく気が抜けたのを感じながら、少女の頭をそつと撫でた。汚れた手で触るのは気が引けるが、猿轡のせいで口を利くことができないので、せめてこうしてやることしか、心配を取り除く方法が分からなかったのだ。

少女は私が頭を撫でたことに驚いたのか、一瞬目を大きく見開いたが、すぐにふにやりとした笑顔を浮かべた。やだ何この可愛い生き物。種族が違うとか関係無しに可愛い。元々人外キャラ好きだったのもあるかもしれないけど、本当に可愛いなこの子。枷で存分に撫でてあげられないのが悔やまれる。

「ねえお姉ちゃん……どうしたの？ 何で、こんなところに居るの？」

暫く少女の頭を撫でていると、少女が改めて質問した。だが、残念ながら私は喋ることができないため、やはりこの質問に答えることはできない。私は猿轡を指差し、首を横に振った。

「喋れないの……？」

「（こくり）」

少女は思いもしなかったというような顔をして尋ねる。まさかとは思うが、これ趣味か何かだと、好き好んで付けてると思われるのだろうか。シヨックだ。いたいけな少女に変態だと思われたのか私は。

予想外のダメージは大きかったが、とにかく頷き、更にこれを引っ張って、外して欲しいという意思を必死で伝えてみることにする。私は身振り手振りで、少女に猿轡が自力で外れないことを示す。ベルトのような部分に手をかけて外そうとすると、枷が思いの外邪魔で無理なことを、実際にやってみせたのだ。

「これ、外したいの？」

「（こくり）」

どうやらこちらの意図は通じたらしい。ついでに変態的な印象も壊れてくれればいいと思いつつ、再び私が頷くと、少女は必死に猿轡の拘束を解こうと奮闘し始めた。ちょっと髪の毛が引っ張られて痛かったけど、少女の努力と私の我慢も空しく、拘束は少女では全く歯が立たなかった。チクシヨウメ！ 某独裁者が脳裏で悪態をついた。

「お姉ちゃん、ごめんね……」

「（ふるふる）」

少女は困ったような、申し訳ないような顔をして、私にごめんねと謝ってくれた。謝ることなんてない、少女は十分に頑張ってくれた。謝るのはあのデブ共である。絶対殺す。意地でも殺す。私は殺意をより一層固くした。

それはそうと、一番拘束を解くのが容易そうに思えた猿轡さえ少女の手には余った。きつと手足の枷を外すのも無理だろう。猿轡で

無理だったが、私は雰囲氣的に溜息を吐いた。

「……………」

「……………」

「……………あつ、そうだ」

「？」

私の意気消沈具合に、共に肩を落としていた少女だが、不意に何かを思いついたように声を上げた。

「あのねお姉ちゃん。今からマリアのお兄ちゃん、呼んでくるね。マリアじゃこれ、外せなかったけど……………お兄ちゃんは大人だから、きつと大丈夫つ。待っててね……………！」

「（あつ）」

いや、待っててと言われても、私あんまり時間無いんだけど。逃げなきゃいけないんだけど。

しかしそれを伝える間もなく、少女（マリアというのだろう。……魔族で聖母の名前……………）はそう言つと、ぱたぱたと茂みの奥に消えてしまった。子供と言えど、走っている相手に今の私が追い付ける筈も無い。

さてどうする。少女、もといマリアには悪いが、もう行くべきだろうか。悠長にしている暇は無いのだ。逃げるのなら夜の方が何かと都合が良いが、夏の夜は短い。7つの月は真上に無く、傾いてきていることから、夜がそう長くないことは明白だ。

しかし、マリアは兄を連れてくると言つた。マリアの兄がどういう人物かは分からないが、この忌々しい拘束具を外してくれるかもしれないというのは魅力だ。逃亡時間を削るだけの価値はあるだろう。

「（……待てよ……）」

そもそも、マリアの行動自体が罠だったとしたら？マリアとその兄が共謀し、私を油断させてから殺そうと企んでいたらどうなる？私は人間だ。あのデブ共の魔族に対する反応、更に、魔族と勘違いした私への仕打ちを考えれば、人間は魔族を忌み嫌い、恐怖しているのが分かる。なら、魔族が人間に対して同じような感情を持っているとは言いい切れない。大人しく待っていた結果、殺されてしまう……そんな結末はバッドエンド過ぎる。

「（……いや、早まるな。考えろ）」

マリアは少女だ。つまりは幼い故に、人間への敵意などは無いとも考えられる。それが演技かどうか見抜く術は私には無いが、もし本心から心配していたとしたら？今の私は相当酷いことを考えている。もし兄を連れて来た時に私が消えていたら、あの少女は傷付くかもしれない。私がマリアを信用していないことを、言外に示すからだ。

私は基本的に他人のことなんて考えないし、他人の気持ちなんて察することはできない自己中野郎だが、少なくとも好意を持っている相手のことは必死に考える。私はマリアのことを少なからず好きだと思った。だから傷付くかもしれないなんて考えている。

「（なら……それでいいんじゃないだろうか）」

マリアを悲しませたくないなら、ここに居ればいい。

そうだ、こんなに簡単なことじゃないか。何を躊躇う必要がある。もしマリアかその兄、あるいは両方に殺されたら、あのデブ共と一緒に呪い殺してやればいいだけの話だ。

私はそう結論付けると、近くの木に背中を預けてマリアを待った。

「お姉ちゃん……！」

「（マリア）」

再び木の葉が擦れる音が聞こえ、茂みからマリアがやって来た。マリアは私が大人しくここに居たことに安堵したのか、少しだけ不安そうだった表情を、ほっとしたものに変えた。

うん、やっぱり可愛い。マリアはきつと、本当に親切心で動いてくれていると思う。待っていて良かった。私は傍に座り込んだマリアの頭を撫でてやった。

……あれ？ よく見ればマリアは一人だ。連れて来るって言ってたお兄さんは？

「あのね……お兄ちゃん、もうすぐ来るよ」

茂みを見つめる私の意図が分かったのか、マリアは私を安心させるように笑顔でそう言った。そしてそれを証明するように、もう一度茂みが揺れる。

「——マリア、一人で先に行かない」

「お兄ちゃん」

「（この人か……）」

現れたのは私より年上に見える、背の高い男性だった。やはりマリアと同じく肌は青く、右目を覆うような髪は黒。瞳は黒に金で、ローブの背中から生える翼は、マリアよりも大きかった。大体の特徴はマリアと合致するが、彼のこめかみの辺りには、羊のような黒

い立派な角が生えていた。

どうやら、男性はマリアに置いて行かれたらしく、そのことをやんわりと嗜める。容姿を窺うが、顔は良いけど、私は何となく陰気臭いというか、陰湿そうな印象を受けた。マリアと似た顔立ちなのに、全然印象が違う。

「お姉ちゃん。この人がね、マリアのお兄ちゃん……ヨシユアお兄ちゃん」

「（今度は神の子の名前か……）」

兄妹揃って、種族に似合わない名前だなと思う。まあとりあえずマリアに紹介されたのもあるし、ただ見ているだけというの何なので、私はヨシユアさんに軽く会釈をする。日本人としては立礼したいが、立つのが少し大変なので、ここは大目に見て欲しい所だ。

「初めまし……て……」

「（こくり）」

「……」

「……」

ヨシユアさんは私を見ると、何故かそのまま動かなくなった。やっぱり人間を警戒しているのか？

「……」

「……」

「……」

「……」

「……お兄ちゃん？」

……あまりに沈黙が続き過ぎる。いや、私も無言だけど、猿轡し

てるんだからこれは仕方ない。マリアも不思議に思ったのか声をかけるが、それすら無視。

まさかこれがデフォルト？ いや、さっき普通に喋ってたから多分それは無い。それに警戒とかしてるにせよ、何で棒立ちのままノリアクシヨン？ 私何かしたか？ いや、むしろこの人に何かあった？

そう思った私は、よくよくヨシユアさんの顔を観察してみた。…あれ？ 何か顔赤くね？ 暑いからとか、そういうのじゃない脂汗かいてない？

いや待てよ……まさか……

「……っ！！」

「お兄ちゃんっ？」

「（ああ……やっぱり、そういうフラグか……）」

ヨシユアさんは私が凝視しているのに気付くと、はっとしたように近くの木の後ろに隠れた。そしてちらちらとこちらの様子を窺っている。うぜえ。

だが間違いない……これはフラグだ。フラグが立ったよハ。ジ……！

「お兄ちゃん、どうしたの？ お姉ちゃんのあれ、外してあげてよ……」

「マ、マリア、私は、その……っ」

「（どもってます私と目を合わせません顔が赤い拳動不審ハイコレ決定！ 何でここでテンプレ設定が復活した？ 馬鹿なの？ 死ぬの？）」

残念ながら、異世界召喚勇者物語的なテンプレの一つ、勇者のハーレム、あるいは逆ハーレムのテンプレが、今ここで復活したよう

です。全力で要らねえ。

ここで私がテンプレ的な主人公だとすると、相手が自分に好意を持っていることに気づかないというのが鉄板だ。しかし、私は違う。勇者どころか魔族呼ばわりされている、テンプレ枠から外れた主人公である。ラノベ・乙女ゲー愛用者なめんなよ。

「（今フラグが立ったところで、ウザイし面倒なだけなんだよな）」

ヨシユアさんと私の間に立ったフラグは、恋愛フラグと見て間違いない。女が苦手なのかもしれないが、どの道私に惚れるのとどっちが先かというだけの話だ。

これだけ聞くと私が凄いナルシストに思うだろうが、こんなまさにテンプレ通りの反応されて気づかないなら、そいつは馬鹿だ。「えっ？ まさかね……」で済むようなものではない。読者やユーザーとしては毎回思うんだよね、「気付け馬鹿」って。まあ好きだから読むし、プレイするんだけど。

そんなわけで、読者・ユーザーの観点をしっかり持つ私としては、ガチ主人公になったとしても、フラグを見抜くのは容易いということだ。他意は無い。

しかし、問題はここからである。見たところ、ヨシユアさんは純情こじらせて不審者になるタイプだ。下手したら絶対ストーリーカーに走るよこの人。雰囲気既に暗いし、陰気だしね。

で、そんなタイプは往々にして、女性とコミュニケーションを取れない場合が圧倒的に多い。妹のマリアはきつと平気なのだろうが、フラグ立ってる私となんて、絶対に無理だろう。ていうか、この距離感が既に無理なことを証明している。そんな人が私に接近して、更に接触し、拘束を解くなんて、できる筈が無い。絶対無理だ。

「（しょうがない……マリアには悪いけど、放置して行くか）」

兄を木の陰から引つ張り出そうとしているマリアに申し訳なく思
いながら、私はのそりと立ち上がる。あ、やばい。月大分傾いてき
てる。急がないと本格的にまずい。早く遠くに行かないと……。

「お姉ちゃん……！」

「あつ……！」

「（ごめんねマリア、親切にしてくれたのに無駄なテンプレが発
動しちゃったせいで困らせて……あとヨシユアさんはウザイので早
く目を覚まして下さい。このフラグは面倒なんで）」

私の様子に気づいた二人が、同時にこちらを見つめる。伝わるか
は分からないが別れの言葉を胸中で口にして、私はその場を後に――

「ま……待って下さい……！」

「……！？」

私は突如ヨシユアさんに肩を引つ掴まれ、大きく上体が傾いた。
この野郎何で急にアグレッシブになった！？　つか私の足元見てな
かったのか！　足枷付いてて走り去ったり普通に歩いて行ったりで
きるわけないだろ！　何でこんな全力で引き留めたダメエエエ！！
足枷のせいで思うように踏ん張れない私は、ろくに抵抗もできず
に反転し、ヨシユアさんに向かって倒れた。当のヨシユアさんとは
言えば、私がこんなにあつさり倒れるとは思わなかったのだらう。
かなりの間抜け面で、更に咄嗟の対応も取れず、私の下敷きになっ
て一緒地面に倒れた。

「……っ！」

「っ痛……！」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

マリアが私達を心配して駆け寄ってきた。後頭部をぶつけたらしく、悶絶しているヨシユアさんの上から離れるべく、私はその場でもぞりと起き上がる。

……ん？ 何か尻の辺りに違和感が……。

「……………」

ここまで無駄にテンプレか、ラッキースケベめ。私は最早突っ込む気力も失せていた。

「けほっ、げほっ……」

溜まり切った唾液に数回咽ると、私はヨシユアさんから忌々しい猿轡をひったくり、森の奥に投げ捨てた。あんな物二度と見たくない。付けるのなんてもっと御免だ。ケツ、と放り投げた方角に悪態をつき、口元を乱暴に拭う。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよマリア。心配してくれてありがとうね」

そう言つてマリアの頭を撫でてやると、マリアは可愛らしい笑顔を浮かべてくれた。まさに聖母^{マリア}、いや天使。本当に可愛いなこの子は。連れて帰りたい。

だがそれに比べて……

「……………」

ラッキースケベ、違った、ヨシユアさんは何ていうか、うん。残念過ぎる。何で猿轡を投げた方向を名残惜しそうに見てるんだ。まさか欲しかったのか？ちよつとキモいぞ。駄目だよこの人、出会つて数分で変態という名の紳士にクラスチェンジしてる。

そもそもこの猿轡を外してもらう時も、ちよつと気持ち悪かった。ラッキースケベに気付いているのかどうかは知らないが、私が押し掛かったつてというのが相当キたらしく、元は青かった筈の肌が見事に真っ赤だった。後頭部をぶつけた痛みを通り越して妙に興奮して、息遣いも変態臭かった。だがここまではまだいい。まだマシ

だった。

問題はここからだ。マリアが拘束具を外して欲しいと何度も言ったのに、彼は自分から私に近づけなかった。予想していたことだし、仕方が無いので諦めて立ち去ろうとするのだが、ヨシユアさんはその度に引き留めるのだ。しかもその時だけ自分から近づくのだから、余計に腹が立つ。最終的に何とか私が木の方に追い詰め、無理矢理迫って取らせたのだが、息遣いが更に荒くなった。めっちゃ匂い嗅がれてた気がする。ちよつとぞつとした。記憶が劣化するの、あんまり待ちたくないんだけど。

「ねえお姉ちゃん、お姉ちゃんの名前は？」

ヨシユアさんを残念な目で見てみると、マリアが可愛らしく上目遣いで質問してきた。だから何なのこの可愛い生き物は！ 今だけ私はヨシユアさんのことを変態呼ばわりできない……！

「う、うん、そういえば自己紹介できなかったもんね。私は依^{よる}。

芹沢依だよ」

「ヨル？」

「そう、依——ヨルだよ」

「……ヨルお姉ちゃん！」

私の名前を知ったのが嬉しいのか、マリアはまた良い笑顔を向けてくれた。ああああ可愛い！ 可愛いよマリア超可愛い！ 私今ならロリコンって言われてもいい！ この手枷さえなければ、もう滅茶苦茶に抱きしめたい！

「…………ヨル、さん…………」

だが、私の幸せな気分を木端微塵にするように、背後から不吉な

声が聞こえた。ぼそりと私の名前を呼ぶヨシユアさんは、天使のような妹と違って、顔を赤らめながらも影のある不気味な笑顔を浮かべていた。こう、ニタア……って感じの。顔が良くなかったらただの不審者だが、顔が良いので、まだ「陰のある青年」みたいな感じでギリギリで許されるレベルだ。イケメンという名の変態の癖に。だが……まあこれでもマリア同様、彼は私の恩人に当たるのだ。喋れるようになったのだし、きちんと礼を言うべきか。私はヨシユアさんに向き直った。

「その、ありがとうございます、ヨシユアさん」

「……！！！！……わっ、私の、名前……っ！！」

「はい」

「……も、もう1回……いい、ですか？」

「……ヨシユアさん」

「~~~~っ！！！！！！！！」

ああもう駄目だこの人、救いようが無い。名前呼ばただけで身悶えてるよ。

マリアはこの兄の様子を初めて目にするのか、さつきから私とヨシユアさんが何かアクションを起こす度、オロオロと兄と私を交互に見やって困っている。うん。初めてあの人が喋ってた感じを思うに、マリアには本当に普通に接してみたいだから……そりゃ戸惑うわ。

それにしても、もう随分時間が経った。月はもう3つ森の木々に隠れているところから、残された時間はあまり多くないだろうし、私もいい加減精神的にも肉体的にも疲れているのだ。早く逃げて、安全な隠れ場所を確保し、休みたい。

……よし。さっさと終わらせよう。私は少し意を決すると、木の幹をばんばん叩いてるヨシユアさんに声をかけた。

「あの、お忙しいとこ申し訳ないんですけど、こつちも外しても
られませんか？」

「……あつ……その枷、ですか……」

ヨシユアさんは私が発する言葉を一言も聞き漏らしたくないのか、
即座に奇行を止めて私に向き直る。だがここで気になったのは、彼
が枷を外すことに、さっきの猿轡の時と違って赤面するのではなく、
困った顔をしたことだった。

「そ、その枷……見たところ、強力な呪具です。枷を嵌めている
者自身の魔力を利用して術式が展開され、対象の魔力を封印、及び
枷自体の物理的強度と、術式保護のための魔術的強度を、魔力の許
す限り上げています。これを外すには専用の解言を告げるか、無理
矢理枷を破壊するか……あるいは、膨大な魔力で無理矢理術式を壊
すしかありません」

「それ、ヨシユアさんできます？」

「その……ヨ、ヨルさん……のお力になりたいのは山々ですが、
私の力では、ど、どれも……。ヨルさん、かなりの魔力をお持ちの
ようなので、封印がとんでもないレベルになって……それに、物
理的に壊すのも、む、無理です」

「そう……ですか」

相変わらず目は合わせず、人差し指同士を突き合わせてもじもじ
とした軟弱な気持ち悪い仕草をしているが、会話の内容が真面目な
ためか、ヨシユアさんはかなりまともに喋る。「ヨルさん」と言っ
た時だけ一氣に変態臭い声音だったが、それを帳消しにできるくら
い普通だった。

だが、状況は全く進展しなかった。私はこの枷をこれからも付け
続けなくてはならないことが決定したのだから、当然である。むし
ろ悪くなったと言っている。枷が外れる方に賭けていたからこそ、

私は時間の浪費を良しとしていたのだ。それが失敗に終わった今、私は会話が可能になったこと以外に何のメリットも得られず、ただ徒に時間を消費してしまっただけなのだから。

「（くそ、やっかいな物付けてくれやがって……あのデブ共ます許せなくなったな）」

私はギリ、と齒を食いしばり、城を睨みつける。あの豚共め、やってくれやがる。生きたまま燻製にして家畜の餌にしてやるうか。そんな拷問計画を立てつつ、私は今後のことを考える。正直これが外せなかったのは痛手だが、それにこだわり過ぎても時間がもつたないだけだ。こういう時はすぐに次の行動に移らないと、二の足を踏んでいる内に失敗するのがセオリーである。

逃走に最も必要な時間はもう少ない。では、その残り少ない時間をどう有効活用するかがこれからの課題だ。そのために今必要なのは……

「……ねえマリア、この辺りってどういう場所？ 教えてくれない？」

私はマリアに、この辺りの地理を訪ねた。地理のことが分かれば、ただがむしゃらに逃げるよりは、ある程度賢く逃げ回れるだろう。時間が無いのなら地理を把握し、それを上手く活かすしかない。土地勘の無さを少しでもカバーすれば、少しは逃走の助けになる筈だ。

「うん。えつとね……ここは人間界の、エウラタって国だよ。あの壁の向こうがエウラタのお城と町で、ここは町の外の、ヘジユデの森なの」

「あの城下町以外で、近くに街とか村とか、人が居るところは？」
「森をあつちに抜けた川の向こうに、ラーシャ村があるよ」

「ここから川までは近い？」

「うーん……ちよつとだけ遠い」

マリアの教えてくれた情報を元に、私は頭の中で地図を作る。月が地球と同じように西に沈むと仮定して、城はここから南。川はここから北東。更に川からそう離れていない場所に村……と。

さて、私が城の者なら、脱獄犯をどう追うだろうか。逃走経路が不明だと仮定したら、まず城下町を搜索するだろう。特に裏町やスラムといったものは、人の出入りが多い城下町のような場所なら必ずあるだろうし、そういう場所は沢有りの人間が隠れるのにうつつけの場所だからだ。それと、町の外の搜索は整備された道ではなく、この森を対象にする。森の中なら隠れる場所はそれなりだし、自生している茸や木の実、木の根などを食べることもできる。飢えの心配が無くなるからな。そして次に搜索するのは、村の方だ。木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中である。城下町と同様、人に紛れる可能性がある。

「（つまり、人里は追手がかかるからアウト……）」

選択肢から城下町と村の存在を消し、森に潜伏するのも危険とする。残されたのは川だけだが……そうだ、いつそ川を下るというのはどうだろうか。川に入れば匂いが消え、犬を使った搜索をされた場合、そこで撒くことができる。幸い今は夏だ、水温も高くないから、凍死の心配も無い。ただこの枷があるから、あんまり水深が深かったり流れが速かったりすると、溺れる可能性がある。

だが、川はいずれ海に出るだろう。海には港があると考えられるし、流れ着いた先に無かったとしても、海岸線に沿って行けば辿り着くかもしれない。そこで船の一つにでも潜り込めば、追手も来ない筈だ。それに上手く流れに乗ることさえできれば、体力を無駄に消費することなく、水が運んでくれる。危険だが、やってみてもい

いだろう。それにこの土まみれの格好も、いい加減に何とかしたい。

「マリア、ありがとうね。ヨシユアさんも。私そろそろ行きます」

「あ、あの、ヨルさん、さっきから、どこに行くおつもりで……？」

「あの城の連中から逃げんの。どこでもいいから逃げないと殺される」

「こ、殺されるっ？ヨルさんが？」

「ヨルお姉ちゃん、何で殺されるの……？」

「何だか知らないけど、私、魔族だとか言いがかり付けられてんの。私は人間以外のものになった覚えなんざないってのに……！」

「……え？」

私の言葉に、ヨシユアさんは勿論、マリアも、ぽかんとした顔をした。あれ？私何か変なこと言った？

「ヨルお姉ちゃん……人間なの？」

「うん」

「で、でもヨルさん、ま、魔力だって、黒いですし……魔族では？」

「は？ いやいや、そんな馬鹿な」

突然何を言い出すんだ変態という名の紳士。私の親は普通に人間で、肌は青くなかったし、目も普通で、魔法なんて使えないし、翼も角も無かった、関東在住の日本人なのだが。祖父祖母も同じく。そんな人間しか生まれようのない環境で生まれ育った私に向かって、何を馬鹿なことを。100歩譲って勇者だとしても、魔族なんて人外な存在ではない。

「黒魔力は、ま、魔物、及び魔族……魔界の民、特有の魔力の色

です。だから貴女は、ヨ、ヨルさんは、魔族で間違いないかと……」

「お姉ちゃん、人間の姿だけど、魔族でしょ……？」

「……えーと」

……。

嘘だろ。

「（嘘だ、だって私人間だよ？それとも、私の世界の人間がこっちで言う魔族なわけ？ いや、それはない、だって私とマリア達じや全然見た目が違う。それに人間の姿だって……でも私、人間で、魔族じゃなくて、）」

「ヨ、ヨルさん……」

「ヨルお姉ちゃん……？」

私はその場にへたりこみ、ごちゃ混ぜになる頭を抱えた。

勿論、私は人間だ。生粋の日本人で、確実に人間種だ。間違いない。

だがこの二人、そしてあの城の連中は、私を魔族だと言う。人間であるデブ共から言われれば、それは言いがかりだとはつきり否定できる。だが、魔族であるこの兄妹までもが私を魔族だと言うと、途端にはつきりと言えなくなる。私は人間であることを否定され、更に人間ではないと肯定されてしまったのだ。

否定と肯定は、どちらか片方だけだと、使われなかったもう片方で反論ができる。だが、両方の言葉を使って同じ根拠で突きつけられると、それらは互いを「確認」という形で補い合い、逃げ道が無くなってしまうのだ。

そして今私は、その否定と肯定の袋小路に追い詰められている。

「いや、私、人間だし……魔族じゃないし……」

「いえ、ヨ、ヨルさんは、間違いなく、私達の同胞です。でなきやマリアがわざわざ私を呼んで、あ、貴女を助ける筈が無いのですし……」

「うん……マリア、ヨルお姉ちゃんが人間なら、殺してたよ？」

何てことだ。いつの間にか、私は命がけで自分が人外であると証明していたというのか。ちょっといたいたいけな笑顔にぞっとした瞬間だった。ていうか、やっぱり人間と魔族ってそういう仲なんだな……あ、いや待て待て、話がずれてるな。

とにかく、私は人間であり、魔族ではない筈……いや、ないのだ。私は人間だ。いくら人外キャラが好きだったとはいえ、自分がいきなり「実は人間じゃありません」なんて言われて、納得なんのできるか。大体見た目に変化があるとか、そういう諦めるしかない要素が提示されたわけでもないのだから。きつとラノベ展開的に考えて、突然変異とか、勇者の恩恵として召喚された時に、その魔族かどうかを見分ける基準っぽい「黒魔力」とやらが宿ったとか、そういうことに違いない。

「（よ、よし。そう思ったら落ち着いてきたな……）」

「大丈夫？ お姉ちゃん……」

「あ……うん……」

私はマリアにちょっと引き攣った笑みで答えながら、とりあえず私は人間だということ、問題を棚上げした。もういいじゃん、こんなの考えたくない。

それに時間が……そう、時間が無いんだった。やばい忘れてた。早くしないと。

「と……とにかく、私もう行くから。色々ありがとう」

「あつ……ま、待って、ヨルさん……」

「（だから何だってんだよアンタは！）」

私が立ち去ろうとすると、案の定ヨシユアさんが引き留めてきた。ラッキースケベ事件、もとい私の押し掛けりを経験したせい、2回目以降は思い切り肩を掴んだりすることは無く、軽く制服の裾を

掴んで呼び止めるだけなのだが、それをシカトすると、服を掴んだままずっと後を付けてくる（ちなみに、マリアも普通について来てしまう。あれ？もしかしてこの兄妹こういうとこ似てる？）。なので無視できず、ずるずると引き留められ続けるのだが、本当に何なんだこいつは。何がしくて呼び止めるんだ。

……あ、そうだ、フラグ立ってんだった。好きな人と一緒に居たくて呼び止めちゃうんですね分かります。ただここまでくると迷惑だけだな！

「……何ですかヨシユアさん。私急いでるんですけど」

「そ、その……えっと……」

「……………」

「あつ…………だから、その…………」

これが乙女ゲーなら、主人公は辛抱強くこの変態野郎の言葉を待つのが正しい選択肢なのだが、生憎私は本当に時間が無いし、このフラグがへし折れたところで痛くも痒くもない。ていうかむしろバキバキに折らせて下さい。できれば本人の骨ごと。

……とか考えていたせいか、ヨシユアさんが少しびくついた。どうやら顔に出ていたらしい。彼は私の雰囲気を感じたのか、ようやくおずおずと口を開いた。

「いいい、行く当てがないなら…………う、うちに来ませんかっ！」

「…………ヨシユアさんの家？」

私に、ストーリーカーの家に行けと？それどう考えてもろくでもない展開しか考えつかないぞ？…………いや、こいつ私に自分から近づけないから、突然襲われるような悪夢のような展開は無いか。あるとしたら嫉妬に狂って、とかっていうヤンデレ発動パターンだけど、ヤンデレが発動するようなフラグは無いしな。

……でも何か嫌なんだよなあ。正直、行ったらまた妙なフラグが立ちそうな気が――

「お姉ちゃん、マリア達のおうち、来て……？」

「お邪魔します」

即答。

だって上目遣いに小首を傾げるとか、それ反則だから。マリアマジ天使。いや魔族。でも天使。美少女万歳。もう私は堂々とロリコン宣言する。

そうだよ、冷静に考えれば、ヨシユアさん一人暮らしじゃないよ。マリアが居るんだ。二人きりなんていう、変態を興奮させるだけの要素は無い。それに利用するようで申し訳ないが、これって要は彼らの家に匿ってもらえるということだ。これはヨシユアさんの好感度が上がるというデメリットを、かなり上回るメリットである。

「ヨ、ヨルさん……！！！」

「本当？ ヨルお姉ちゃん、来てくれる？」

「うん。行かせて？」

「やったあ！ お姉ちゃん、マリア達のおうち、こっち！」

笑顔のマリアに手を引かれた私は、喜びのあまりくねくねと体を動かすヨシユアさん……違った、変態を視界から外しながら、ゆっくりと森を進んだ。拘束されたままだしね。

そうして10分ほど茂みや木々の間を進んで行くと、やがてひっそりと木々の間に隠れるように口を開けた、不吉な感じのする洞窟が姿を現す。マリアによると、この洞窟と魔界が繋がっており、マリアはここから人間界に遊びに来るらしい。私を見つけたのも、こっそり遊びに来たからだそうだ。

ちなみに何をして遊ぶつもりだったのかを訊くと、「えっとね、

暇潰しに、町の人を殺すつもりだったの」と、はにかんだ笑顔で答えた。マリアは可愛いから、何をしても許されると思うんだ、私。

「何か靄が出てるけど、これ何？」

「これ、瘴気だよ。黒魔力で出来てるの。あのね、ここは魔物か魔族……魔界の人じゃないと、通れないの。それ以外が通るとね……瘴気で死んじゃうんだよ」

マリアが洞窟に充満する紫色の靄を指し、説明してくれる。確かに、瘴気としか言いようのない雰囲気の靄だ。大体RPGでは魔界とかそういうところに発生しているとされる瘴気だが、この世界でもそうらしい。

……ていうか、魔族か魔物じゃないと死ぬって、それ……

「私、死ぬんじゃない？」

「なな、何故、ですか？ ……ヨルさんは、魔族ですよ？ 瘴気は、同じ黒魔力を持たない者を、き、拒絶するんです。で、ですが、黒魔力を持つ者にとっては、た、ただの靄……むむ、むしろ、魔力を回復できるものなんです」

奇妙な動きをようやく止めたらしいヨシアさんが、マリアを挟んで私に不気味に囁いた。子供一人分の距離があるのに、どうしてこんなぼそぼそとした声がこんなにはつきりと聞こえるのだろうか。少し呪いじみている。

しかし、黒魔力とやらさえ持っていれば、瘴気は人間の私でも平気ということか。良かった。ヨシアさんには全く安堵できる気がしないが、彼の言葉には安堵する。それに、この瘴気がある限り、追手は絶対にかからないことも分かった。もう追手のことは忘れていいだろう。

「あつ……出口だよ、ヨルお姉ちゃん」

「マリア、走るのは止めなさい。ヨルさんが大変だろう」

妹に対しては普通に喋るヨシユアさんの注意を受けながらも、早く私を魔界に連れて行きたいらしく、どうしても小走りになるマリアに必死について行くと、行く手がほんの少し明るくなった。マリアの言う通りあそこは出口で、ここから先は魔界とやらになるのだろう。

「……うわぁ……」

私の目の前の魔界の景色に、思わず顔が引き攣るのを感じた。やっぱり魔界は魔界と言うだけあって、ヨシユアさんのように陰気臭い雰囲気だったのである。

空は墨をぶちまけたように黒い。だがこれは多分夜だからで、光はやや暗いものの、やはり月が7つあった。星の無い空には代わりのように暗雲が立ち込めて、たまに雷が鳴ってる。そんな空をコウモリっぽいものとか、ドラゴンのようなものが飛び交い、ついでにモンスター的なものも飛んでいる。

地面は基本的に荒野……いや、焦土？ここは不毛の土地だと声を大にして宣伝しているような大地だ。そして、大地に申し訳程度に生えている植物は、彩りなんて元々無かったというように、見事に黒と白の二色きり。初期のテレビか。木は全部枯れ木で、葉が茂っているものは一つとして無く、どうやって種子を作っているのかがかなり疑問だったが、遠くに森らしきものが見えるので、多分本当は葉っぱがあったのだろう。

そして、極めつけは瘴気だ。この瘴気はどうやら地面のひび割れから噴き出しているらしい。そのひび割れはあちこちにあり、小さな間欠泉の如く勢い良く噴き出しているのだ。こんなに瘴気が噴出していれば、陰気臭い雰囲気もう割増しになろうというものだ。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

魔界にドン引きした私に、マリアがきょとした顔で尋ねる。そうか、人間なら引くか嫌がるかの二択であろう魔界も、この子にとっては生まれ育った自分の世界だから、引くも何も無いのか。ヨシユアさんも同様にきょとした顔をしている。

「あ、いや……何でもない」

「そう？ ……おうち、こっちだよ」

何か一々気にしたら負けな気がしてきた私に取り繕ってそう答えると、マリアはまた私の手を引いて歩き出した。たまに良く知る二足歩行の生物っぽい骨が軋がっているのを見かけたが、私は何も見なかったことにするのを忘れなかった。

「着いたよお姉ちゃん。ここがマリア達のおうちだよ」

……言っただけだが、マリアとヨシユアさんの服が質素なローブだったため、彼らはファンタジーで言う村人的な生活水準なのだと思っていた。いや、人間的な基準を魔族に当てはめていいのかはまた別だけど、少なくとも富裕層には見えない。

だが、これは何だ？

「……………」

自宅だとマリアが言うこの家は、魔界らしく暗い配色の、お化け屋敷的な雰囲気漂わせる、大層デカイ西洋屋敷だった。しかも立

派な門には魔族の門番付きで、屋敷と門の間には、枯れてない木や、白黒でない暗い色の花が植えられた、いやに広い庭がある。

「……あのさ、マリア。もしかしてマリアとヨシユアさんって、貴族とかそういうのだったりする……？」

「えっとね、マリアはまだ爵位っていうの貰ってないけどね、お父さんとお兄ちゃんはあるよ！」

「父が大侯爵で……私は、ここ、侯爵です。さ、さすがに父には、勝てませんから……」

勝てないとかそういうのはよく分からなかったが、とにかく、彼の父と彼は爵位持ちらしい。貴族だ、本当に貴族だこの人ら……！私殺されるんじゃないか！？むしろこの二人と一緒に居ていいのか！？

私は今すぐ回れ右をして逃走しようとするが、運の無いことに、門番と目が合ってしまった（この門番、目が1つだ……）。門番は私に対して非常に怪訝そうな目線を向けるが、その隣に居た二人の姿を見ると、酷く慌ててこちらにやって来た。

「お二方、一体どちらに居られたのですか！ マリア様に次いでヨシユア様までもが突然屋敷から消えてしまわれて、大騒ぎだったのですよ！？」

「だって、おうちに居ても退屈なんだもん……」

「客人を連れて来た。人間に大層酷い目に遭わされたらしい。メイドと、念のため医者も呼んで、湯浴みの用意をさせろ」

「はっ」

「お姉ちゃん、行こう」

変態という名の紳士から、今度は侯爵にクラスチェンジしたヨシユアさんがテキパキと指示を出すのに呆気にとられながら、私はマ

リアに手を引かれ、一生足を踏み入れることなんてなかったであろう屋敷に足を踏み入れた。

「（……疲れた）」

私は側に控えているメイドさん（何かすごい肉感的で、良い匂いのする美女。ここに来てからずっとお世話をしてくれてる。女淫魔^{バスキュー}かな……）にバレないように、胸中で溜息を吐く。マリアとヨシユアさんの兄妹に色々と良くしてもらっているのは分かっているのだが、正直、私はそれにかかなりのストレスを受けていた。

マリアによって屋敷に足を踏み入れてしまつて以降、結果的に言えば、至れり尽せりと言つていい。

枷のせいで脱ぐことが叶わずに制服のままだが、仕方なしに着たまま風呂に入れられたため、全身清潔になっている（ちなみに、魔法的なもので服は一気に乾いた）。脱獄の際に破れていたらしい部分も繕われたし、髪もメイドさんに綺麗に整えられて、ちよつと痛んでいた筈の髪は見違えている。腕が四本ある医者っぽい人に徹底的に怪我や病気が無いかチェックされ、健康も保障。しかも何故か薄く化粧までされていて、鏡を見た時はどこの誰かと思つたくらいだ。

だが……正直、至れり尽せり過ぎる。ここは確かに侯爵家ではあるが、私自身は貴族ではないし、委縮して仕方がない。大体、どう考えても彼らに殺されるしかないような人間の私が、魔族の巣窟とも言える場所でのうのと過ごせる筈も無い。なのにメイドさん達は兄妹の客だからと畏まつて、色々とお菓子とか勧めてくれるし、もうさすがにどう対処していいのか分からなくなった。私もそこまでは神経太くないよ！

そんなわけで、私は今絶賛お疲れモードである。今までの疲労も

あつて、体が枷よりも重く感じる。私は座り込んだ異常にふかふかのソファーから動くことができず、かといってうとうとなんてもつとできる筈も無く、ぼんやりと燭台の火を見つめていた。

「（……これからどうなんのかな、私）」

これからのことは問題が山積みだ。いくらマリアもヨシユアさんも私に好意的とはいえ、いつまでもお世話になりっぱなしというわけにはいかない。ていうか、私が無理。だって私、良くされても何も返せないし、そこまで親しいわけでもないのに居候は気が引ける。それに今のところ、私は魔族に対してはほぼ全くとっていいほど恐怖や敵意を感じていないが（ただし、無礼者！とかで殺されるかもという心配は除く。ちなみに嫌悪レベルで言えば、むしろ人間の方が悪印象）、もし人間だと知れたら、私は魔族達に即刻殺されるだろう。よくある勘違いフラグだけで生き延びるのは、ちょっとギャンブル要素が強過ぎる。

それに、枷も何とかしたい。一生枷付きで過ごすなんて冗談じゃない。私はマゾじゃないんだ。

ヨシユアさんの話の通りなら、これは私の魔力で封印・保護されている。多分私、召喚勇者にありがちなテンプレチート補正があると思うから、私の魔力を上回るような力を持つ存在なんて、皆無に近いだろう。居るとしたら、それこそ魔王とかそういうラスボス的存在だろうと思う。そんなのに会いに行く勇氣は持ち合わせていない。

そうなると、残りは解言……字面的に、これを外すためのキーワードだろう。これを使うということになるか。きっとあのデブなら解言を知っているに違いない。なら、やはり当初の予定通り、力と知識を付けてあいつらをぶち殺して、その時に吐かせるしかないわけだが、それはそれでまた大変だ。

何せ私は枷でこのザマ。魔力も封印されてるから、魔法とかそう

いうのも使えないだろう。肉弾戦も魔法も無理。そうすると知略・謀略で何とかしなくてはならないわけだが、それをどう身に付けるかである。誰かに師事するのが一番だが、身元もはつきりしない、しかも手足を拘束されている怪しい小娘に、誰が教授してくれるのだろう。更に、それらを何とかして身に付けたとしても、私自身が策を実行できない以上、誰かに代行してもらわねばならない。私のために動くような人なんて心当たりがある筈も無いし、金で雇うにしても一文無しときたものだ。八方塞がりである。

「（何より、帰れるかな……）」

そう。最大の問題は、元の世界に帰れるかどうかということだ。今までは脱獄と復讐しか考えなかったが、それが一応一区切りついた今、この一番大事な問題に着手していいだろう。私はこんな異界の地で一生を終えるなんて考えられないし、そもそもここで命が保証されるのかと言えば、答えは否である。殺すのには特に抵抗が無いが、殺されるのなんてまっぴらごめんだ。私は自分の身が何より可愛いとも。

異世界召喚もののテンプレで考えると、召喚された主人公は大体帰れない。帰れたとしても何かリスクがあったり、とんでもない条件があったりするものだ。だがしかし、私の場合はまだそれがはつきりしていない。つまり、帰れる可能性は現段階では0ではないのだ。帰れるのならさっさと帰るし、帰れなきゃ帰れないで、また色々と考えないといけない。そう、とにかく帰れるのかどうかの可能性を検討しなくては始まらないということだ。

「（とりあえず、召喚魔法とかそういうのについて訊いてみるか。できればマリアに訊きたいけど、こういう話はやっぱりヨシユアさんの方がいいかな……）」

何たつて侯爵なのだ。変態という名の紳士だが、フラグの立つて
る侯爵である。今までもそうだったし、多分大体のことは答えて教
えてくれる筈だ。

そういえば、後で来るって言ってたけど、マリアもヨシユアさん
もいつ来るかな。やっぱり私を殺すとか、そういう展開になっ
てんじゃないだろうな……

「ヨル様」

「！」

私が再び私の殺人計画を疑い始めると、それを遮るようにして女
淫魔（^{キュバス}仮）のメイドさんが私に話しかけてきた。何事かと思ってい
ると、どうやら私が考え込んでいた間に先触れがあったらしく（あ
あ、貴族っぽい……）、もうすぐマリアとヨシユアさんが来るとの
ことだった。

ていうか、このメイドさん本当に色っぽい……メイド服という名
の凶器だろこれ。同性なのにすごいクラクラする。めっちゃ良い匂
い。

「ヨル様、何か……？」

「あ、いえ、何でもないです」

思わずメイドさんを凝視していたせいか、ちよつと怪訝そうな反
応をされてしまったので、慌てて取り繕う。幸い深く突っ込まれる
ことは無く、丁度良くやって来たらしいマリア達を出迎えに行っ
てくれた。

「ヨルお姉ちゃんっ」

「マリア」

扉が開くと同時に入ってきて抱きついてきたマリアは、ただの天使だった。どうやらあの質素なローブは、所謂「お忍び用」だったらしく、今は可愛い黒いゴスロリ風のドレスに身を包んでいる。どう見ても小悪魔なのかもしれないが、マリアがあまりにも可愛らしいため、やはり私には天使という形容詞しか浮かばない。

しっかし会って間もないのに、随分懐いてくれてるなあマリア。超嬉しい。これも勇者の補正かな……ラッキー。

「ヨ、ヨルさん……っ」

「……ヨシユア、さん？」

「ははは、はいっ！！」

次いで現れた背の高い男性は間違いなくヨシユアさんなのだが、思わず疑問符が付いてしまった。

顔がイケメンなのに陰気臭いのと雰囲気陰湿なのは変わらないのだが、マリア同様「お忍び用」だったらしいローブから貴族らしい服装に着替えると、かなり受ける印象が違う。陰気で陰湿というのはどうしても払拭されないが、服装がきちんとしているだけで「陰のある美青年」くらいに見える。いや、元々そうだったと言えばその通りなのだが、やっと正しくそれを認識した感じだ。

とは言え、やっぱり私の前では挙動不審な変態という名の紳士らしい。せっかく侯爵にクラスチェンジしたのに、これじゃ逆戻り……いや、もうこれクラスじゃないか。称号だな。クラス・侯爵、称号・変態という名の紳士。うん、これだ。

ヨシユアさんはもじもじとドアの所から私の方を窺い、目線が合えば外し、外してはまた見るという面倒なことを繰り返している。マリアは慣れたのが無視して私にじゃれ付けけど、メイドさんは困ってるよ。何とかしてあげたいけど、今更ながら客で、しかも平民である私が、侯爵のヨシユアさんに注意してもいいものか。まあそれ以前に、私が邪魔だとか鬱陶しいとか言ったら、何するか分から

ない感じはあるんだけど……。

「――ヨシユア、いつまでそこに立っているつもりだ？」

密かにヨシユアさんの扱いに困っていると、ドアの向こうから壮年の男性の声が響いた。他にも誰か居るのか？

侯爵であるヨシユアさんにこの口調で、しかも壮年の男性のもの……となると、もしかして……

「……すみません、父上」

「客人をいつまで立たせておく気だ？ 早く部屋に入りなさい。それにマリア、淑女^{レディ}が突然抱きつくなど、はしたないぞ」

「はい……お父さん」

やつぱりか！ やつぱりお父さんだよ！ 大侯爵来ちゃった！
途端に緊張の走る私を余所に、兄妹は父親の言葉に従い、ヨシユアさんは私から距離をある程度取りつつもちゃんと部屋に入り、マリアは近くのソファに座る。その様子に壮年の男性が頷くような気配がすると、扉が大きく開かれ、彼の姿を私に見せた。

「君がヨシユアとマリアが連れて来たという客人か。私はアモン215世、名はヨセフ・レドランド。魔王陛下より、恐れ多くも大侯爵の位を賜っている。そして、この二人の父親だ」

「わ、私はヨルと言います」

目が赤いという以外は兄妹とほぼ同じ特徴を持った壮年の男性、もといヨセフさん（神の子の大王の父親の名前か……）が、威厳のある声で名乗ったので、私も慌てて名乗り、ついでに頭を下げる。向こうは大侯爵なんだから、こっちが頭を下げて問題無い筈だ。

ヨセフさん……いや、ヨセフ様？ もうどっちでもいいや。ヨセ

フさんは「ふむ……」と小さく唸ると、私とヨシユアさんに近くのソファに座るように促した。私は大人しくマリアの隣に座り、ヨシユアさんはマリアに羨ましそうな視線を送りつつ、私から遠い一人用のソファに座る。ヨセフさんは私の前のソファに腰かけた。

「ヨル、君は人間に殺されるところを逃げ出してきたと聞いた。その辺りを詳しく聞いても構わないかね？」

「……はい」

ですよね！ 息子が突然得体の知れない女を連れて帰ったとなれば、父親としてはそりゃ心配ですよね！

……と、重苦しい自分の精神状態を、少しおちゃらけて誤魔化してみるが、ヨセフさんの鋭い視線がぶれるわけでもない。私は召喚されてからここまでに至る経緯を、包み隠さず話すことにした。隠したところで意味は無いだろうし、隠し通せるとも思えなかったからだ。

「……なるほど。話は分かった」

私が全てを話し終わると、マリアはよく分からないのか不思議そうな顔をしていて、ヨシユアさんは真面目な顔をして落ち着いていたが、拳を強く握っていた。私が人間に問答無用で地下牢にぶち込まれたというくだりからこうなのだが、私が理不尽な目に遭ったことに怒っているのかもしれない。……逆ハ―補正からの好意のせいとは言え、ちよつと好感度上がるわ。

ちなみに、肝心のヨセフさんと言えば、変わらないポーカーフエイスのまま、じつと私を見つめている。そしてそのまま、部屋の中は沈黙が支配してしまった。

「……それで、その、私を殺します？」

私はヨセフさんの方から口を開くのが何となく怖くなって、話題はアレだが、こちらから会話を持ちかけてみることにした。するとヨセフさんは私の言葉が不思議だったのか（ですよね！）、ポーカ―フェイスを崩してちよつときよとん顔になった。あ、この顔ヨシユアさんに似てるかも。

「死にたいなら殺しても構わないが、死にたいのかね？」

「まさか！ でも、私人間ですし……」

「ヨシユアから聞いているのだろう？ 黒魔力は、魔界の民特有の魔力の色だと。ならば君は魔族に違いない。我々は嫌いでもない限り、同族を殺さない」

「でもそれ、召喚の時の副作用とかかもしれない……」

「いや、それはない。そもそも、魔力の色は変化するものではないのだ。魔力とは魂の発するエネルギーであり、その色は魂の色そのもの。そして魂の色は、その器によって決定する。もし君が界を越えた召喚により何らかの作用を受けたとしても、君の器が人間のままであるのなら、魂は黒にだけはならない。黒き魂は、我ら魔界の民の器にのみ宿るのだからな」

「だけど私は異世界の人間ですし、その法則が当てはまらないかも……」

「いや、当てはまらなかったとしても関係ない。我々の世界では、黒魔力を持つ者は全て魔界の民だ。君が黒魔力を持っているという時点で、君は魔族と認識される。人間からも、我々魔族からもな。つまり、君自身が自分を人間だと言おうが、肉体が本当に人間であろうが、魂の色さえ黒であるのならば、君は魔族でしかありえんだよ」

「……………」

ヨセフさんの清々しいまでの言い切り様に、私はこれ以上反論す

るのを止めた。ここまで言われてしまつては、反論できる余地など無い。

それに、どうやら魔族かどうかの判断基準は魔力、魂の色のみらしいというのが分かったから、自分が魔族だというのに抵抗が無くなったのである。魂や魔力なんて目に見えないものだけが判断基準なら（いや、何か口振りのにヨシユアさん達は見えてるっぽいけど）、自分の正体が実はグレムリンだ、なんていうのよりよっぽど良い。要するにゲームで言う「魔法使い」とかの職業が、私の場合「魔族」になったというだけなのだろう。本当は「勇者」の予定だったのになあ……。

「（何だ、あんなに悩んでたのが馬鹿みた——）」

「だが、見たところ君の姿は、人間の姿になるように魔法——いや、呪いがかかっているだけだな」

「——は？」

私はヨセフさんの爆弾発言に、思わず間の抜けた声で返事をした。
え？ 何それ、何の話？

「何だね？ そんな寝耳に水のような顔をして。覚えが無いのか？」

「いや、私の世界に魔法も呪いもありませんし、かけた覚えもかけられた覚えもありませんよ？ 何かの間違いでは？」

「仮にも魔界の大侯爵が、隠蔽されているわけでもない呪い……しかも妖精の呪いを見抜けないとでも？」

「そうですよすみません！」

鋭さを増したヨセフさんの視線に委縮しつつ、私はとりあえず謝った。幸い、ヨセフさん的には軽口の範疇だったのか、それ以上は何も言われなかった。

しかし……人間の姿になる呪い？ それってつまり、私は元々人間じゃないとでも？

「（いや、そんなことあり得ない。だってそんな馬鹿なこと……だって、だってそれじゃまるで、）」

「ヨルお姉ちゃん？」

まるで私が、本当に――

「（魔族みたいじゃないか）」

そう考えて、私はぞつとした。

私は一体今、何を考えた？ 本当に本物の魔族？ そんな、馬鹿馬鹿しい……。

私の名前は芹沢依。人間の両親から生まれた生粋の人間で、地球の日本国関東圏在住、18歳の女子高生。

魔族なんかじゃない。ちょっと魂は黒いかもしれないけど、間違
いなく人間。人間なんだ。

「ふむ……異界から召喚された娘に妖精の呪い……そしてヨシユ
アだけでなく、私までもが手を出せない程の封印を展開する膨大な
黒魔力……まさか……」

「父上……？」

「ヨル。……ヨル！」

「!!」

私はヨセフさんに名を呼ばれ、はっとして彼を見る。すっかり考
え事に没頭していた。

「今すぐに私と来なさい。ヨシユアにマリア、お前達もだ。この
娘を拾ったのはお前達だからな」

「父上、一体どちらへ？」

「城だ。魔王様に急ぎ謁見する」

「な……っ!？」

魔王？ え、今この人魔王に会って言った？ え？

私も大混乱だが、突然のことについて行けないのは私だけではな
いらしく、マリアもヨシユアさんも狼狽していた。だがそんな私達
の様子など全く気に留めることなく、ヨセフさんは控えていたメイ
ドさん達に、城への連絡と馬車の支度を指示している。本気だ、こ
の人本気で言ってる。

「（いやいやいやいや、展開が超次元過ぎるよ!?!）」

ちょ、待ってよ。無理無理、魔王と会えなんてそんな、いきなり
ラスダン挑ませないで！ 私レベル1！ 勇者チートでレベルカン

ストだったとしても、私の精神的にレベル1だから！

「父上、突然どうされたのです！？ 何故ヨルさんを魔王様と引き合わせるなど……！」

「理由は後で話す。早く支度をするんだ、ヨシユア、マリア。それとヴィヴィアン、ヨルを馬車まで連れて行け」

「はい、旦那様。さ、ヨル様」

「ちょ、ちよつと、そんな……！」

「——私の言葉が、聞こえなかったのか？」

渋り、混乱する私達に、ヨセフさんが静かに告げた。そしてその時、私はヨセフさんが蛇の尾を垂らし、口から僅かに炎をちらつかせているのを、見た。

……見て、しまった。

「——っ……！」

それは一瞬だ。一瞬だったが、確実にあったことだった。とんでもない脅威が目の前にあり、そして私は無力な小娘に過ぎないのだと、頭では分かっているにも、本当は分かっていたことを、まざまざと見せつけられた。

全身に絡みつくような、底知れない黒い何かに、体が全く動かない。こんな枷なんか、彼の前ではあっても無くても同じなのだと、そう思い知らされる。強者の前では、弱者は弱者以外の何でもないのだと、この上なく痛感させられた。

私は初めて、本物の命の危機に直面したのだ。

「聞こえているなら早くしろ。後10分が出る」

ヨセフさんはそう言うと、一人静まり返った部屋を出て行く。ド

アの向こうにその背中が消えて、ドアが閉まり、パタンと音が響いた時、やっと私達は呼吸を思い出ししていた。

「お、お兄ちゃ……お姉、ちゃん……」

「……マリ、ア」

私も怖かったが、幼いマリアは父がキレたことが相当怖かったのだろう。その大きな目にたつぷりと涙を浮かべて、腰が抜けた私に縋りついてきた。私は辛うじて声を絞り出し、手を重ねてやるのが限界だった。

少しして、私はぎこちなくヨシユアさんを見やった。元々彼の肌は青いが、今はそれ以上に青褪めて、緊張しているのが見て取れる。そして女淫魔（サキユバス）のメイドさん……ヴィヴィアンさんは、辛うじて立ってはいえるものの、今にも気絶してしまいそうな顔をしていた。きっとメイドという立場から、仕える主人とその家族、客人の前で無様な姿は見せられなかったのだろう。だが、ここで彼女が気絶したとしても、私達はそれを責めたりなどしない。あんな恐怖体験の後では仕方がない、殺されなかったことこそが奇跡なのだと、そう思うからだ。

「……い、行きましょう、ヨルさん」

「はい……」

あの人に逆らってはいけない。私をはじめ、この部屋に居た全ての存在は、それを心に深く刻みつけた。

あの後、私はヴィヴィアンさんに抱っこされ（そう、私が枷で歩くのにも不自由していることから、彼女がずっと抱っこで運んでく

れているのだ。美女と物理的な距離でお近づきになれて嬉しいけど、超恥ずかしい。ていうかヴィヴィアンさん力持ち）、黒い馬車に乗せられた。既にヨセフさんが乗り込んでいたためにちょっとビビってしまっただが、もう別に怒っているわけではないらしいヨセフさんは、あっけらかんとしていた。どうやらあまり引きずらないタイプらしい。更に少ししてマリアとヨシュアさんが乗り込み、コウモリの翼が生えたガリガリの馬が引く馬車は、魔王城に向かって走り出した。

道中は途中までは比較的穏やかだった。多分、もうヨセフさんが怒っていなかったことと、私を含めて全員意外に切り替えが早かったせいだろう。私はマリアに私の世界の話を話したりして、割と楽しく過ごしていた。ただ、ヨシュアさんがこの狭い空間に私と居ることが落ち着かず、ずっと顔を赤らめて挙動不審だったせいだと思う。ヨセフさんがキレてしまったため、後半は恐ろしく空気が重かった。

だが、その時の空気の重さすら、今受けているプレッシャーに比べれば、何でもないのでないかと私は思った。

何せ今私の目の前に居るのは魔界の王……魔王と、その妃なのである。

「魔王陛下、並びに妃殿下。この場を設けていただけたことに、このヨセフ・レドランド・アモン、心より感謝致します」

魔王の城に着いた後、私達は真っ直ぐにこの謁見の間に通された。何メートルになるのか分からない高い天井と、いつそ無意味なほどに広く、不気味な雰囲気はこの謁見の間。そこで今私とマリア、ヨシュアさんは、ヨセフさんの後ろに控える形で片膝を着き（私は枷のせいで両膝だが）、玉座に座る魔王夫婦に謁見している。

否、謁見しているというよりは、むしろ生贄にされている気分で

ある。さつきから玉座の方からの視線が本当殺人級。しかもサイドからの臣下っぽい魔族からの視線も、視線という名のレーザーみたいに becoming。穴開きそう……！ まさに針の筵！

「挨拶などいい。それよりアモン……その話、本当だろうか？」

「確証はございませんが、その可能性は非常に高いかと」

「もし違った場合は……分かってるな？」

「はっ。いかなる罰をも甘んじて」

ヨセフさんと魔王は、一体何の話をしているのだろうか。魔王の声はどこか焦れたような、何かを期待するような声音だ。

対して、ヨセフさんはこの期待に、酷くプレッシャーを受けているようである。彼がどれくらい恐ろしいかを知った身としては、その声が微かに震えていることが信じられない。それだけ、この魔王が強大な恐怖であるということだろうか。

視線を左右にちらりと向ければ、マリアはじつと床を凝視して固まっているし、ヨシユアさんは私がすぐ隣に居ることに動じる余裕すらないのか、やはり緊張して冷や汗をかいていた。かく言う私も、今すぐここから離れたくて仕方がないのだが。ヨセフさん早く話し終わって……！

「——ヨル」

「……っ、はい」

唐突にヨセフさんに名前を呼ばれ、私は反射的に顔を上げる。すると、周囲からの目線、特に魔王夫婦からのものがますます強くなった。もしかして、まだ顔上げちゃダメだった？ 私不敬罪で死ぬ？ 私は慌てて頭をまた下げるが、正直、近衛の兵士に殺されるんじゃないだろうか。だが、私の心配とは裏腹に、おろおろしている私をヨセフさんが自分の前に押し出しただけで、物騒なこととは何も起

きなかった。良かつ……いやいや、良くない。何で私を前に出したんですかヨセフさん！ 魔王の前なんかに出さないで！

だが、私の叫びなど聞こえる筈も無く、ヨセフさんは魔王夫婦に私のことを説明し始めた。

「この娘はヨルと言います。エウラタ城の者の手により異界から召喚されたのですが、魔族として捕われてこの呪具の枷を嵌められ、処刑される所であつたのを逃げ出し、こちらに控える私の子供達が助けました。本人は自分を人間と申しておりますが、ご覧の通り膨大な魔力の色は黒。その身にかけられた妖精の呪いに関しては、知らぬと」

「異界の者に、妖精の呪い……確かに……」
「……ヨル……」

な、何で魔王、期待込めて呟いてるの？ 何で王妃は私の名前をしみじみと懐かしむように呼んでるの？ え？ 何？ 何なの？

馬鹿の一つ覚えのように私が混乱していると、不意に影と、とても大きな黒いものが二つ、近づいた。顔を上げなくても分かる。これは、魔王夫婦だ。

さつと血の気が引いた。ヨセフさんがキレた時も生きた心地がしなかったが、今もまた生きた心地がしない。しかもヨセフさんの時より、もっとずっと大きな脅威に晒されている。

「顔を上げよ」

「……っ」

魔王が静かに告げ、私は息を呑む。震えながらそつと顔を上げれば、私の顔をじつと覗き込む男女が居た。

とろけるような闇の黒を身に宿した男性と、豪奢な夜空の黒を宿した女性。どう考えても、この二人は魔王夫婦だろう。ヨセフさん

すら怖気づく程の、怖くて美しい、圧倒的強者にして捕食者。

だが私はその二人を目の当たりにして——何故か、恐怖よりも先に、違和感を覚えた。既視感^{デジャヴ}、と言ってもいい。絶対に初めて会ったはずのこの魔族達に、何故か頭の隅で、奇妙な引つ掛かりが疼くのだ。

何だ？この疼きは何なんだ？

「……枷を外してやろう。手足を差し出せ」

「……は、い」

言われるがままに私が枷の嵌められた手足を差し出すと、魔王は一瞬緑色の目を光らせ、その身から闇のような黒い奔流を枷に流し込んだ。すると、一つ私が瞬きをする間に全ては終わり、ゴトンという重苦しい金属音と同時に、私の手足は拘束から解放されていた。多分、魔力で無理矢理封印を解いたんだろう。魔力チートだと思われる私の魔力を使った封印を無理矢理壊すとは、やっぱりこの人は魔王なんだ。

だが、あまりに呆気無い。私は簡単に解放されたことが俄かには信じられずに目を瞬かせていたが、魔王は枷を手にし、再び緑の目を光らせると、それを一瞬で跡形も無く消し去ってしまう。こうして、私は初めから何も無かったかのような状態……この世界に召喚される前の姿に、至極あつさりと戻ったのだった。

「妖精を」

「はっ。こちらでございます」

次いで魔王が一言告げると、近くに居た兵士が鳥籠を持ってきた。見れば、その中にはひしゃげた羽の生えた小人……多分ピクシーだろう。そのピクシーが、酷く怯えた様子で監禁されていた。

だが、魔王はピクシーが怯えていることなど気にも留めず……い

や、むしろそのピクシーに滅茶苦茶怒っているようで、美しいとは言えない端整な顔を鬼のように歪めて、羽が折れ曲がるのも構わずに（ああ、ひしゃげてたのはこのせいか……）、その小さな体を思い切り握り締める。そして妖精を私の前に突き出し、隠そうともしない怒りと憎しみに満ちた声で喋りだした。

「この娘か？」

「……………」

「答えよ、この娘か？」

私から露骨に目を反らし、沈黙するピクシーに更に苛立ったのか、魔王は握り締める力を強くする。だがピクシーは無言を貫き、それに怒る魔王がまた手に力を込めた。

「答えよ……この娘か？」

「……………」

「……これで最後だ。首を搦じ切られなくては答えよ」

「……………はい……この娘です」

沈黙と怒りを何度か繰り返し、業を煮やした魔王が殺すと脅してピクシーはやっと観念したのだろっ。傍目に見ていても分かる程に震えながら、蚊の鳴くような声を絞り出すようにして、ついに私を何かだと認めたのである。

何だ？ この妖精は一体、私を何だと認めたのだ？ 駄目だ、怖い。知りたいが、知りたくない。私は耳の奥で何かが熱く脈打つのを感じ、その足音に怯えた。

だが、魔王夫婦と臣下達、そしてヨセフさんは、そんな私とは違って目を見開き、何かに驚愕していた。全員何故か驚愕に喜びを滲ませていて、特に王妃は今にも声を上げて泣き出しそうな顔をし、魔王もまた、頬を紅潮させている。

だから何なんだ、一体何が起きている？ 謁見の間を包む、不気味な雰囲気につかわしくない、明るい空気が、じりりと私の肌を焦がすのを感じた。

「ならば、私の言わんとしていることも、分かるな？」

「……はい」

「なら早く呪いを解きなさい！」

「………はい」

魔王夫婦に急かされて、ピクシーはぼそぼそと何か呪文のようなものを唱え始めた。何を言っているのかは全く理解できなかったが、ただ何となく、この呪文が終わってしまったら、私にとって何か大きな、取り返しのつかないことが起きるのだと、そんな漠然とした予感を感じる。

そしてそれは一種の禁忌のように恐ろしく、しかし抗い難い欲求を湧き起こす、境界線なのだと。

「………っ」

終われ。いや、終わるな。残酷な真実も甘い嘘もいらないから。何も知らない、気付かないままで、ただ無知なままで居させてくれ。本能的な好奇心。根源的な恐怖。その二つがごちゃごちゃに混ぜ合わさって、頭の中で暴れている。私はそのどちらの手を取るのも怖くて、ただ目の前のピクシーを凝視することしかできなかった。だけど——私がどちらの手を取らずとも、結局「終わり」が背を押して、その坩堝に突き落とすのである。

「——名前を返すよ、【ヨルムンガンド・レイゼルシュバルツ】」
「………！？」

ピクシーが口を閉じた瞬間、私の全身を何か奇妙な感覚が襲い、次いで眩い光が溢れだした——私の体から。

「わっ……」

突然の出来事に驚いた私は、思わずぎゅっと瞼を強く閉じる。だが光は一向に収まる気配を見せず、むしろ奇妙な感覚が大きくなるのに比例して、徐々に大きくなっていった。

この奇妙な感覚……それは例えるなら孵化であり、脱皮であり、蛹が蝶になるのに似ていると思った。私は私を包んでいた何かがぼろぼろと崩れていくような感触を、どこか他人事のように感じていた。

「……？」

やがて光が収まり、私はそっと閉じていた瞼を持ち上げた。ぱちぱち。瞬きを試みるが、さっきまで光っていたとは思えないくらい、私は何ともない。体を触ったり見たりして確認するが、やっぱり何でもない。変わらないのだ。

……あれ？ 何かこう、物語始まります的な、シリアスな展開になると思ったんだけど……ちょ、私なんか恥ずかしくないか？ 一人っぴいシリアスだったんですけど。あれ？

私は何となく気恥ずかしいと言うか、一人気まずくなり、周囲を見渡す。

「おお……」

「ああ……！」

「……っ」

「（あ、あれ……？）」

な、何で魔王夫婦半泣きなの？ 臣下の人達、何でざわ…ざわ…
ってなってるの？ ヨセフさん凄い間抜け面になってますよ？ あ
っ、マリアとヨシュアさんまで？ みんなどうしたの？ 何かあつ
た？

もしかして、魔族って集団で居ると急に奇行に走るんだろうか…
…なんて、私がそんな失礼なことを考えていると、急に目の前の魔
王夫婦が私を抱きしめてきた。

「へっ？ ちょ、何を……」

「お帰りなさい私の可愛い娘！」

「よくぞ帰った我が娘よ！」

「………は？」

「（お腹空いたな……）」

突然抱きしめてきて、何か凄く感動して大泣きしているらしい魔王夫婦から逃げるように、私はそんなことを考えていた。突然の出来事を直視したがない脳は思いの外冷静で、取り留めの無いことを次々と考えている。これぞ現実逃避だ。

「18年間、私達がどんな思いでいたか……！ ああ、まさかこうして再び貴女を抱きしめられるなんて！」

「（こっちに来てからもう何時間経ってるかな？ ヨシユアさんの家でお菓子勧められたけど、原材料訊けなくて不安になって結局食べなかったし）」

「ヨルムンガンド……お前がこうして無事でいてくれただけで、私は、私は……っ！」

「（眠気は何かもう徹夜のな感じで無いな。でも肉体的疲労は濃いか……そりゃ、あんな脱獄劇やったし、疲れるのも当たり前だよね。絶対明日筋肉痛だわ……）」

「……ヨルムンガンド？ どうした、ヨルムンガンド？ まさかどこか怪我でも？」

「ヨルムンガンド、ヨルムンガンド……ヨル」

「え？あ、うん」

突然名前を呼ばれ、私は不意を突かれた形で軽く返事をする。……ってヤバイ。凄く軽く返事したけど、呼んだの王妃様じゃん！これマジで殺されるんじゃない？ 今度こそ不敬罪で殺される！

「す、すみません！ ごめんなさい王妃様！ こんな気安く返事

して……！」

「あら、どうして謝るの？ 親子だもの、そんな堅苦しくする必要なんてないのよ？」

「そうだぞヨルムンガンド。18年もこの羽虫のせいで離れていたんだ、遠慮などする必要はない」

「あ、いや、親子だとかそういうご冗談はちよつと……」

「ああそうだな、そのピクシーにもう用は無いのだし、さつさと殺してしましましょう？ また私達の可愛い娘を取り替えられたら、たまったものじゃないわ！」

「（無視か）」

「ああそうだな、そうしようアイリーン」

「ひつ！ ご、ごめんなさい！ もうしません、しませんから、命だけは……！！」

「18年間、貴様を殺す日を待ち侘びたぞ……我が娘に手を出した罪、死をもつて償うがいい！！」

「きひゃっ！！」

魔王は私を抱きしめたまま、ピクシーを握る手に力を込め、そのまま圧殺した。まさに羽虫のようにその命を散らしたピクシーの小さな体からは、ぷしゅりと、まるでシュークリームでも握り潰したように盛大に血が飛び散り、魔王の手を、床の絨毯を、王妃を、そして私を濡らす。

だが、魔王がピクシーを殺したことも、それに誰も疑問を挟まないことも、別に全くどうでも良い。むしろ血で汚れた魔王夫婦は思わず目を奪われてしまうくらい美しく、逆によくその姿が似合っていたし、その笑顔を見れば、これは日常茶飯事の内に入るのだらうとも思う。ただ、折角ヴィヴィアンさん達に綺麗にしてもらったのに、もう髪や制服を汚してしまったことがちよつと気になった。

あと……私を「ヨルムンガンド」と呼ぶことも、私を娘と呼んで憚らないこともだ。ちよつと頭落ち着いてきた。そろそろ対面準備

できてきたみたい。

……あ、勇者とかだったらさ、こういう時に「なんてことを……！」ってまず怒るのがセオリーかな。ま、私テンプレから外れちゃってるし、今更か。それに本当にどうでもいいしね。

「まあ大変、汚いピクシーの血で汚れてしまったわ。すぐに綺麗にしましょう、ヨルムンガンド……ヨル。あなた、私達は行きますね」

「ああ、私もすぐに行く。……アモン、並びにその子供達は私の執務室まで来るように。それと、誰かメイドを呼んでこの羽虫を片付けさせる」

「はっ」

「御意に」

「さ、ヨル。いらっしやい」

「はあ……」

私は王妃と、控えていたらしい数人のメイドさんに連れられて、謁見の間を出た。出ていく時にちらりとマリア達の方を見やったが、どうも何が起きているのか分からず、困惑しているらしい。……何か、私のせいでごめん。

「あらヨル、アモンの息子達が気になるの？」

「えっ……あ、はい。恩人ですし……」

「そう……ふふっ、そうだったわね」

私がマリア達を見ているのが気になったのか、王妃様がそう尋ねてきた。私は無難な返答をしたつもりだが、何だかノリが娘の恋人を詮索する母親っぽいのが気になる。

母親っぽいと言えば……ちょっとだけでもそれ、訊いておくか。

「あの、王妃様」

「言ったでしょうヨル。親子なのだから、そんな風に堅苦しくならないで？」

「いやその、何で私がお二人と親子なんです？ 私の親はちゃんと元の世界に居ますよ？」

「ああ……そう、そうね。突然だったものね。18年も人間として生きていたんだもの、すぐには信じられないし、ちゃんとした説明が必要よね……そうね、お父様がいらしてから、そのことをゆつくり親子水入らずでお話ししましょう？」

「はあ……」

「ふふふつ……さ、お父様を待つ間に、この薄汚いピクシーの血を落としてしまいましょうね。それと、この服も着替えましょう。貴女に似合いそうな洋服がたくさんあるの。選ばせてちょうだい？」

「……分かりました」

心の底から私を慈しむような王妃様の目に、今はこれ以上何かを尋ねるべきではないだろうと判断した私は、大人しく王妃様達に連れられて行った。

ヨセフさんの屋敷で通された客間らしい部屋よりも、遥かに豪華な部屋。揺り籠が置かれているその部屋のソファに座り、私は魔王夫婦と三人きりで対面していた。

私は王妃様に勧められた、貴族っぽいドレスを着せられている。配色は黒をベースにモノトーンだ。現代人の私の感覚からするとコスプレという言葉が浮かぶが、異世界のここではこれが普通らしいから、ここは無視だ。

さて、私から見て左には魔王が居る。闇の色の服を纏った、深い

緋色の髪に緑の目をし、竜の翼と2本の角を生やした、端正な顔の30代程に見える男性。右には王妃様が。夜空の色のドレスを纏った、腰まで届く艶やかな鴉の濡れ羽の髪と紫色の目をし、こめかみから鹿の角を生やした（この角はサイズを変えられるようだ。ドアの幅よりあったから縮めてた）、20代くらいの百合の花が似合う美女。

まさに美男美女の夫婦だが、二人共私の方に限りなく愛情深い眼差しを向けて来るので、近寄り難いような雰囲気は無い。とは言え、さすがに二人の間に座れと言われた時は、全力で辞退したが。

「まず、どこから話したのか……」

「初めから、全てをお話しすればよろしいのでは？」

何としても私を妻との間に座らせたがつてこねていた魔王が、その風体に似合わず「うーん」と唸るが、「ヨルは思春期だから仕方ない」と言つて譲歩した王妃様に言われ、「そうするか」と頷いた。どうやら夫婦仲は良いらしい。何となく空気が自然だ。きつと政務の時とか、いつもこういうのかも知れない。

「私とアイリーンが出会ったのは22年前、私がまだ王子であつた頃で——」

「すみません、その話私出ます？ 20年以上前なんて、生まれてすらいませんよね？ 私が関係する話からでお願いします」

いくら夫婦仲が良いからつて、馴れ初めとかは今要らない。いや、気になると言えば気になるけど、思わず突っ込むくらい今は要らねえ。

「いや、重要なことだぞ？ 私とアイリーンが出会わなければ、お前は今ここに居ないのだから」

「私が登場するくだりまでショートカットして下さい」

私がキツパリとそう言うと、魔王は渋々といった感じで口をつぐみ、妻の方を見やる。王妃様は困ったように微笑むと、「では私」と言い、ゆつくりと口を開いた。

「今から18年前の春の日……私達に娘が生まれたの。名前はヨルムンガンド。私達はヨルと呼んでいたわ」

「……ヨル」

「そう、ヨルよ。……私達は娘と幸せに暮らしていたの。だけど、それも長くは続かなかったわ……」

王妃様の語ったそれは、まるで御伽噺のようなものだった。

ある日、魔王夫婦が執務を終えて娘の部屋へ行くと、揺り籠に小さな影があった。妖精ピクシーが居たのである。ピクシーは娘の眠っている揺り籠に向かい、何か魔法をかけていた。悪戯をしていたのである。

魔王夫婦は慌ててそのピクシーを捕まえ、娘の安否を確認した。だが、揺り籠に娘は居なかった。居たのは娘の姿に変えられた、ただの人間の赤ん坊だけだった。

ピクシーは悪戯好きの妖精で、時たま自分の子供と赤ん坊を取り替えてしまう。だがこのピクシーはあるうことか、魔王夫婦の子供と人間の子供を取り替えてしまったのである。

これに魔王は怒り狂い、取り替え児の赤ん坊をすぐさま殺すと、ピクシーに自分の子供はどこだと迫った。だが、ピクシーは娘をただの人間の子供と取り替えたのではなく、異世界の人間の子供と取り替えたと言うのだ。

妖精は住处である妖精郷を通じ、あらゆる世界に行くことができる。そこでこのピクシーはほんの出来心で、異なる世界の子供を取

り替えてやろうと思ったらしいのだ。

いくら魔王とは言え、異世界のものを召喚術で無差別に召喚することはできても、目標を定めて召喚することは難しい。かと言って妖精のように異界を自由に渡することもできないし、娘を連れて帰れとピクシーを自由にしては、逃げられてしまうだろう。

もうどうすることもできなかった。娘は永遠に夫婦の手から離れてしまったのである。

魔王夫婦は酷く嘆き悲しんだ。たった一人の大切な娘が、手の届かない場所に連れ去られてしまったのである。当然だった。

「せめて我々にできたのは、奇跡が起きて娘が戻った時、人間になる呪いを解くため、ピクシーを捕まえておくことだけだった。妖精の呪いは普通の呪いと違って、かけた本人にしか解けない、厄介なものだから……」

「だけど、奇跡なんてそう起きない……召喚術で無差別に召喚を続けたとしても、どんな世界から召喚されるかも定かではないから、娘をそれで呼び戻すのは、砂漠で一粒の砂を探すのと同じことだったもの。もう娘には会えないと思っていたわ。でも——」

ここで王妃様は言葉を区切り、魔王と共に私をじっと見つめる。

……言いたいことは分かった。

「奇跡は起きた。偶然人間が召喚したのがその娘——私だった」

「ああ、そうだ。お前は間違いなく我々の……魔王、ロキ・レイゼルシュバルツ・サタンと、その妻アイリーン・レイゼルシュバルツの娘、ヨルムンガンド・レイゼルシュバルツだ」

「……………」

話は分かる。私の世界に本当に妖精が実在するのは別として、
妖精の取り替え児はヨーロッパでいくつも伝承が残っているし、魔

王の娘が人間の子供と取り替えられてしまったというのは、筋が通っている。わざわざ自分の子ではなく、異界の子供と取り替えたというのは気になるが、妖精の悪戯の内容や意図なんて、分かる筈も無い。そもそも、悪戯に遊び以上の意味など無いのだ。

……もう私が魔族で、人間でなく、そして彼らの子供であることも、否定できない。実際に私の魔力は黒く、妖精も呪いを解いたと思われるし、少し前に感じた既視感デジャヴの疼きも、私がこの魔王夫婦の娘ならば、全て辻褄が合い、納得できた。

今まで私の価値観や考えが「おかしい」と言われていたのも、今にして思えば、私が魔族としての根本的な特徴を有していたからなのだろう。呪いで姿形が変わっても、もって生まれた資質は変わらないのかは分からないが、魔族特有の考え方と言ったギャップについては、順応の難しさをあまり心配しなくてよさそうだ。

こちらで魔族として生きていく覚悟はもうできた。私が彼らの子供だと言うのも信じるし、人間でないことも受け入れた。もうそのことに関しては揺らがない。それに元々薄情だから、残るだけの理由と覚悟さえできてしまえば、向こうの世界もあつさり捨ててしまえる。私にとつての元の世界、本来在るべき正しい世界は、こちらなのだから。

ただ、それでもどうしても、一つだけ納得がいかないことが……不安があつた。

「……………」

「どうしたヨル？ お前は私達を守る。ここでの生活やその他諸々は何も心配する必要は無いぞ？」

「そうよ、ヨル。私達は18年間貴女と再開する日を夢見て来たわ。そんな大事な大事な娘を愛さないなんてことも、絶対に無いのよ？」

「あ、その……そうじゃなくてですね……………」

正直、彼らが私をどう扱うかについては、私に対する二人の態度と、私の（恐らくは）魔族的な思考によって、ちよつと予想が付いていた。彼らは言った通り、私を大切に娘として扱ってくれる筈だ。だが……

「……………」

「ヨル、一体何が不安なんだ？」

「正直に言ってみて？」

二人は真剣に私を心配し、気遣ってくれている。このまま沈黙を貫いて、余計な心配はかけたくない。

……私は意を決して口を開いた。

「…………… しょうか」

「え？」

「その……私、本当に、貴方方の娘、でしょうか」

「何を言ってるの！ 絶対に間違いないわ！」

「でも私……二人に、全然似てない」

そう。似てない。似ていないのだ。

妖精が呪いを解いた時、周りの人々がこぞって目を見開いていたことから、私に何か劇的な変化があったのであるうとは思う。だが、私自身が変化をチェックしてみた時、何も無かった。何も変わらなかったのである。

肌がマリア達のように青くなつたわけでもなく、翼が生えたわけでも、角が生えたわけでもない。四肢のどれかが増減したわけでもなかったし、髪の色が変わつたわけでもない。親子だと言うのに、身体的な特徴の共通項と言えば、王妃様と同じで髪が黒いと言うことだけで、それは元々日本人として当たり前の色だった。一体何が

変わったというのだ？

もしかしたら、変化は私には見ることでできない、魂とか魔力とか、そういうものの変化だったのかもしれない。だが、それがあつたとしても、親子なのだから、もっと見た目が似てもいいと思うんだ！ ヨセフさんと子供達は似ていたのだから、魔族にだって遺伝子があつて、親子なら多少なりとも似る筈だ！

「私、自分で言うのもなんですけど、顔立ちに関しては普通です。十人並です。魔王様達みたいに美形じゃありません……」

「……………」

「……………」

私がそう言うと、魔王様と王妃様は、ぽかんとした顔をした。そして少しして「……ああそうか」と何か納得し、ちよいちよいと私を招き寄せる。

一体何かと思いながらも素直に立ち上がると、二人はドレッサーの前に立たせ、そして埃避けのための布を取り去った。

「あ……………」

「ね、親子でしょう？」

「アイリーンの若い頃にそっくりだぞ」

ドレッサーの鏡に映し出されたのは、私と同じ黒いドレスに身を包んだ、王妃様によく似た顔立ちの、紫の目の美少女だった。

幕間 魔王の胸中

「眠ってしまったか……」

「きつと疲れていたのね。ここまで来るのにとっても大変だったでしょうから……」

もう月がすっかり消えてしまった頃、ようやく緊張の糸が切れたのか、娘はソファで眠ってしまった。18年ぶりに見る愛娘はすっかり記憶の中のそれと変わっていたが、寝顔はそう変わらない。そんな些細な発見に妻と顔を見合わせて笑う。

ああ、やっと欠けていたものが戻ったのだ。これを幸せと呼ばずして何というのだろう。

「あなた、顔がだらしないことになっていますわ」

「む……」

妻に指摘されて鏡を見れば、なるほど、確かにだらしない。魔王としての威厳も、どうやら娘の前では霧散してしまうらしい。

だがかく言うアイリーンとて、その顔は笑顔が絶えない。視線は常にヨルムンガンドに注がれ、一秒でも長く眺めていたいというのがよく分かった。

魔界の民は好戦的だが、それ以上に愛情深い民だ。愛情が一度芽生えれば決して絶えることは無いし、特に血縁や男女間の愛はより深く、時間や空間の隔たりをも凌駕する。

だがその代わり、嫌った相手は必ず殺すという側面も持っている。嫌いな相手は要らない。何故なら愛せないからだ。魔界の民は好いた相手に全てを捧げ、嫌いな相手は存在から否定する、1か0の種族なのだ。

そう考えると、異界とはいえ、人間に育てられた娘が、私は不憫でならなかった。

人間の愛は、我々魔界の民の愛と違って、薄っぺらな都合の良い物だ。政略結婚などと言うくだらない思想で子供の伴侶を決め、愛し合って結婚したと言う癖に離婚する。同時に何人もの恋人を持つて睦み、時には家族ですら傷つける。特に決まった伴侶以外とも閨を共にするというのは、淫魔のような性交渉によってエネルギーを得る特例の種族を除き、貞操観念が固い我々からすれば、それは信じられないことだった。

それに、人間と我々では道德観念も異なる。ある程度までは通じる部分は見受けられても、その本質が異なるのだ。人間はその弱さを重視するが、我々は強さを重視する。それなりにルールはあるが、基本的に強い者が弱い者を支配するのが魔界の民だ。殺し殺されることも、奪い奪われることも、強ければ何ら問題は無いのに、人間は等しく弱いために、それを抑圧する。我々にはそれが理解できないのだ。

ヨルムングンドは、妖精の呪いで名前を奪われて人間の姿になっても、魔族の本質までは歪められなかったはず。そんな娘が人間社会の中で溶け込めていたとは到底思えない。こちらの同年代の子供より、ずっと窮屈に育ったのだろう。可哀想に。向こうの世界の人間の家族にさしたる執着が無かったのも、我々にとっては普通の、しかし人間にとっては依存と呼べる程の愛情を貰えなかったからだろう。魔界の民は自分が愛されただけ愛するのだから、やはり、人間と我々は違う生き物なのだ。

「ああ……重くなつたな」

「女の子に失礼ですよ、あなた。……でも、18年だものね」

18年。人間の優に3倍以上の寿命を持つ我ら魔界の民にしてみれば、それはさして長い時間ではない。だが、たった一人の娘を失

った私と妻にとっては、酷く長い虚無の時間で、赤ん坊だった子供が成長するのにも、十分な時間だった。

今こうして眠る我が子を抱き上げて、向かう先は揺り籠ではなく、ベッドである。部屋の持ち主は変わらないのに、持ち主の時間は確実に流れていた。

「ドレスでは窮屈ではないか？」

「でも、よく眠っていますわ。着替えるのに起こすのも可哀想よ」

「ふむ……そうだな」

ヨルムンガンドをベッドに横たえて、顔にかかる妻と同じ黒髪を払う。穏やかに眠っている娘を見て、また顔が弛むのを感じた。妻も同様である。サタン665世の名を継ぎ、魔界で唯一皇帝の階級を持つ最強のドラゴンである魔王も、フルフル一族で初めて君主の階級まで上り詰めたその王妃も、娘の前ではただの親である。

「共に在れなかった18年の歳月の分、たつぷりとこれからは愛してやるう」

「そうですね。本当は1分1秒ですら一緒に居たかったのに、それが18年も引き離されてしまったんですもの、当然だわ」

「とりあえず、明日から暫くはこの子の傍にいますとして、まずは城の警備体制を引き上げるか。また羽虫が入り込むようなことがあつてはことだ」

「ええ。それと、この子を召喚したエウラタの人間共はどうします？」

「我が娘に枷を付け、地下牢に入れるなど、そのようなことをしておいてただでは済まさん。だが、ヨルムンガンドを召喚したということに関しては、王家の一人くらい瀕死で留めるくらいの酌量の余地があるか？だがアモンの息子から根こそぎエウラタを滅ぼしたいと申し出があるが、さてどうするか……」

「アモンの息子から？あらまあ……」

「何だ、アイリーン」

「婚約者の心配は不要かしら」

「何……？」

妻の聞き逃せない言葉に、ぴくりと顔の筋肉が引き攣る。確かにヨルムンガンドを魔界に連れ帰ったのはアモンの子供達だが……まさか……

「謁見の間を出る時、あの子ったらアモンの息子達の方を見つめていたのよ。恩人だからと言っていたけれど、あの子も満更ではないのかもしれないわ」

「早い……そんなこと、私は許可せんぞ！」

「でも、あの子も18歳なんですよ？思春期ですし、それくらいは仕方がないですわ」

「認めん、早過ぎる。18などまだ子供だ。角とて生えていないのだぞ！？」

「それはそうですけど、今まで肉体だけは人間にされていたことを考えれば、角はきつとすぐに生えますわ。角が生えれば一人前、そうでしょうあなた？」

「だが……！」

「今はまだ侯爵ですけど、アモンは大侯爵ですし、きつとまだ伸びるんじゃないかしら？顔も良くて人気もあるし、夫としては悪くないと思いますわよ？」

「……嫌だ！」

何故帰って来たばかりの娘を、突然余所の男に奪われねばならんのだ！絶対にまだそんなことは許可しない！してやるものか！！私は微笑む妻を尻目に、ヨルムンガンドを見やる。……我が娘ながら、大層愛らしく育ったものだ。外見は私に似なかったが、その

分妻に似て美しく育ったのなら、それはそれでいいだろう。

だが、それがもう私の手から離れ行くなど……断じて許せることではない！！

「絶対に誰にも渡さん。二度と手放しなどせん」

「……そうですわね。この子が誰を愛するのか、将来誰と結ばれるのか、それを咎めだてるようなことはしないけど、今すぐにというのはちよつと無理ね」

妻と二人、18年前と同様に眠る我が子を見つめ、その手を握る。それでやつと、私は娘の存在を実感した。

私こと芹沢依（人間）が、まさかの異世界召喚と地下牢からの脱獄劇なんぞを成し遂げた後に、実は18年前に妖精の取り替え児として魔界で行方不明になった魔王の一人娘・ヨルムンガンド・レイゼルシュバルツ（魔族）であると発覚した事件から、一週間が経った。そしてその間、18年間人間として暮らしてきた私が魔界に慣れるためとか、城での暮らしに慣れるためとか、そういった理由で、私は殆どの時間をほぼ両親だけと自室で過ごした。

娘の身に起きた突然の大きな変化を気遣い、空白の時間を埋めようとしている両親、と言えば一見聞こえは良い。そして間違っているわけでもない。だが、ぶっちゃけるとそこまで綺麗ごとな感じの理由ではなく、あの二人が私に構いたくて構いたくて仕方が無く、そのために自室に軟禁状態だったというのが実際のところ真実だと思う。

何せ私の両親……魔王夫妻は、とんでもない親馬鹿の構いたがりだったのだ。

具体的に何をされたと言うと、ちよつと人様には言えないような羞恥プレイを多数、としか言えない。それでもあえてその例を挙げると、食事は毎食魔王か王妃の膝の上で「あーん」だとか（ちなみに、魔族の食生活は、基本的に人間と同じだそう）、どんな些細な移動でも絶対に抱っこだとか（まさにプリンセスホールドした）、寝る時は必ず同衾で子守唄付きだとか（王妃様美声過ぎてびっくりした）、そういうのだ。

これらの行為に対して、全ては愛情表現だと魔王夫妻は言う。……うん、愛情表現。確かにそうだ。でもさ、これ、絶対赤ん坊に対する愛情表現だと思うの。私18歳なんですけど。あの人達の中で、娘は18年間全く成長していないんだろうか。いや……嬉しいと言えば嬉しいけど、うん。愛されてるのが嫌と言う程感じられるか

らね。

ただ、私にとって魔王夫妻はまだ両親だという実感が薄く、初めて会った親戚くらいにしか思えないので、この過剰な接触は……正直、ちよつと引く。ていうか、魔王夫妻の適応力と、私を構いたいっていうオーラが尋常じゃないのが怖い。特に魔王からのオーラがマジでヤバイ。構われ過ぎて主人に懐かない猫って、もしかしたら私のような気分なのかもしれないと思う。

とまあ、私の一週間はその時間に見合わぬ濃い時間だったわけだが、昨日でそんな日々も終わりだ。何故かと言うと、この一週間娘の帰還に浮かれて放り出していたらしい政務をいい加減に再開して欲しいと、昨日臣下の皆さんが揃ってガチ泣きで縋ってきたためである。どうやら魔王夫妻が仕事を放棄していた一週間、魔界は18年ぶりに魔界の姫が戻ったとか何とかでお祭り騒ぎだったらしく、いつもより仕事が山積みだったそう。

魔界がどういうシステムで成り立っているのかは知らないが、魔王と王妃様が揃って仕事を放棄してしまつては、そりゃ臣下も泣きなくなるに違いない。私は渋りに渋りまくつた両親を臣下と共に何とか説得して自室に戻し、今日から政務に戻ってもらうことになったのだつた。

「誰も居ないな……良し」

そんなわけで、私は一週間ぶりに朝を一人で迎えた。実は昨日のことは全て夢なんじゃないかと思つて、両親がこっそり寝ていないか入念にベッドをチェックしたのだ、間違いない。この部屋には私しか居ない。

「……………」

私は親子三人が川の字になっても全く狭くない、恐ろしくデカい天蓋付きのベッドから、そっと足を下ろす。ロクに使用していない靴を履いてその場に立つと、何故か妙に感動を覚えた。何せ一週間も自力での歩行を禁止されていたのだ、それくらいは覚えるか。

何となく高揚した足取りで、バルコニーに繋がる大きな窓（といつか硝子戸）のカーテンを開ける。相変わらず魔界の青空は青紫の暗い色だが、それでも控えめな太陽が振りまく光は、しっかりと今が朝だと告げていた。

「……ヤバい、感動して泣けてきた」

たかがカーテンを開けるだけの動作にさえ、目頭が熱くなる。我ながらよくあんな羞恥プレイ……いや、DM調教に耐えたものだ。ベッドからカーテンまでのほんの数歩分の距離を自分で立って歩いて、一人でカーテンを開け、朝日を拝むのが、これほど素晴らしいことだったなんて……！ 私は自分の精神力を褒め称えるのと同時に、一人の時間というものの大切さを噛みしめた。

……まあ、この一週間毎日聞いていた「おはよう」が当然無かったので、ちよつとだけ寂しさも覚えたが。

「（……子供じゃあるまいし）」

だがそう感じるということは、それが習慣として身に付き始めていたからだろう。魔界の暮らしに慣れるという点では、その辺しっかり功を成しているようだ。

そんなことを考えていると、ドアの方から控えめなノックの音が響く。次いで「姫様、お目覚めでいらつしやいますか？」という女性の声がした。王妃以外の女性が突然私の部屋にやって来るとは思えないから、きっとメイドさんだろう。

魔王の娘

「はい、起きてます」

「では、失礼いたします」

無駄に凝った装飾のドアが開き、メイドさんと執事が一礼して部屋に入った。喋っていたのが一人だったからメイドさん一人だと思っていたのだが、どうやら黙っていただけでメイドさんと執事の二人だったらしい。

「魔王陛下、並びに王妃殿下の命により、本日よりヨルムンガン様付きの侍女、兼護衛となりました、ヴェロニカと申します」

「同じく、本日よりヨルムンガン様付きの執事、兼護衛となりました、ヴォルクスと申します」

そう言っ てきつちり90度の礼をする二人は性別こそ異なるが、蝙蝠のような翼も、艶めかしい肌も、さらさらと零れる紫がかった黒い髪も、そこから覗く茶色い羊の角も、全てほぼ同じもので出来ていた。それに男女で色が全く異なってはいるものの、共通して異様なまでの色香を放っているのも特徴だ。もしかしてこの色っぽい二人、双子か何かだろうか。双子の側近……着実に逆ハーとかハーレムとか築いていつてるな。このラノベ的展開、どこまで続くの？ そんなことを考えながら二人を見ていると、ふと、ヴェロニカさんが誰かに非常に似ている気がした。一体誰だ？ エロいメイドさんに似てる人……うーん。

「王女様？」

「——あ、はい。えっと、よろしく申し上げます。……あの、兄弟ですか？」

「はい。三つ子の姉弟で、私が姉、ヴォルクスが弟、それに私の上に姉がおりますが、姉は城勤めではありません」

「（まさかの三つ子）……あ、もしかしてお姉さんって、ヨセ

フさんの屋敷の女淫魔^{サキユバス}（仮）のメイドさんですか？」

私はヨセフさんの屋敷でお世話になった肉感的な美女、ヴィヴィアンさんを思い出した。そうだ、この二人ヴィヴィアンさんによく似てるんだ。顔立ちとかパーツとか、エロいとか。特に三つ子で同性なだけあってか、ヴェロニカさんはヴィヴィアンさんにそっくりだ。

「ああ、王女様はアモン様の御子に保護されたのでしたね。姉をご存知でしたか。しかし、まだこちらにお戻りになられて日が浅くていらつしやる筈ですが、よく私共の種族がお分かりになられましたね」

「え？ 本当に淫魔なんですか？」

「ええ、私と姉は女ですので女淫魔^{サキユバス}、ヴォルクスは男ですので男淫魔^{キユバス}です。姫様、何故お分かりに？」

「あー……皆さん、異様に色っぽいので」

「左様でございますか」

私の返答に、二人はクスリと納得したような笑みを零した。多分、もつと別に特徴があるんだろうけど、ストレートに1番目立つ特徴を言ったせいなんだろう。何か恥ずかしくなって笑って誤魔化したのだが、二人はむしろそれにはっとしたらしく、すぐに真面目な「お仕事モード」といった顔になった。

そうだ、本来彼らには仕事があった。私は特に時間に追われることは無いと思うが、彼らはいつもスケジュールに追われて仕事をしている。それを邪魔してはいけなかった。

「これより、朝のお支度をさせていただきます。朝食はこちらにお持ちいたします」

「分かりました」

「ではただ今お持ちいたします、王女様」

二人は再び一礼し、ヴォルクスさんは朝食を運ぶために部屋の外へ行き、ヴェロニカさんは一緒に持つてきていたカートから水を張った桶を持って、洗顔やら何やらの支度を始めた。同じことを昨日まで（どんなに断つても）王妃様がしてくれていたのだが、やっぱりこういうのはメイドさんなんかやる仕事らしい。

うん……何か、あれかな。私、マジでお姫様（笑）なんだと思う。ちよつと居心地が悪い、こそばゆい。

一週間ぶりに自力での食事を終え（この時も目頭が熱くなった）、私はヴォルクスさんが淹れてくれた食後のお茶を飲んだ。

基本的にこの世界でお茶と言えば紅茶オンリーらしく、この一週間色々な茶葉で飲んだのだが、私はこのローミスという、全体的に薄い味のお茶が好きだ。どうやらその薄さ故に人気の無い茶葉らしいが、一週間の間に飲んだ他のお茶は、正直言つてちよつと癖が強過ぎたので、以来茶葉だけはこれがいいと魔王夫妻に頼んだのである。どうやら、彼はそのことを二人から聞いているらしかった。

「（さて……どうするかね）」

私はソーサーにカップを置き、今後のことを考えた。親馬鹿な魔王夫妻のことだから、私に何もなくていいとすら言いそうな雰囲気ではあるが、さすがにそれは私自身が許せない。ニートは嫌だ。私は今後自分が何をすべきかを定めるため、ゆつくりと頭の中を整理した。

まず、はつきり分かっていることは、私が無知だということだ。

この一週間、実は私は魔王夫妻からこの世界のことについて、殆ど何も教えてもらっていない。それというのも、そんな話以上に二人が私のことを知りたがり、殆どの時間を私の身の上話などに費やしたためだ。私の知識量は、恐らく子供のマリアより少ないだろう。だが、それで良い筈はあるまい。両親である魔王夫妻の治める国について、娘の私が無知では、両親に恥をかかせることになる。引きはしても、私を絶対的に愛してくれている人達に対して、そんな真似はしたくない。なら、そのためにはどうするか。

「（……もつと本格的に、この世界のことと魔界のことを勉強しよう。常識とか習慣とか、色々）」

よし、勉強だ。勉強しよう。内容によるが、勉強自体はさほど苦ではない。むしろ異世界の勉強なんて面白そうだ、やる気が出る。

……いや待て。勉強するのには何が必要だ？ 本だ。教科書があればそれでいい。筆記用具はあった方が良いが、無くても問題無いと言えば無い。口頭で教わってもいいかもしれないが、本は繰り返し確認できる。勉強に本は必須だ。

だが、私はこの世界の文字が読めない。言葉は何故か通じているようだが、多分それは召喚の時の勇者的チートかなにかの恩恵だと思う。かといって、それが文字の方にまで及んでいるかと言えば、答えは否だ。立証済みである。私はお茶の茶葉が入った缶のラベルを読むことができなかったのだ。これはこの先生きていく上でも、一国の姫としても、非常に問題だろう。むしろ問題しかない。読み書きや常識などの基本的な技術に関しても、早急に何とかしなければならぬのは明白だ。

「（じゃあ異世界史の勉強の前に、基本的な国語から始めないと。後は……）」

他に何か知っておかなきゃいけないこと…… そうだ、魔法。魔法があった。こちらは知っておかなければいけないというよりは、私自身の興味関心による所が大きいのだが、魔法の勉強もしたい。

やっぱり異世界ファンタジーとくれば、魔法は付き物。あんなのが自分も使えるなんて、考えただけでわくわくするではないか。魔力もチート仕様でバカみたいにあるようだし、これは魔法無双するしかない。ていうかしたい。やりたい。そんなもって私を召喚したあのデブ共をぶち殺す。結果的に良い方向に転がったと言えばそうだが、私はあの時の理不尽な仕打ちを忘れてはいないのだ。

「（よし、魔法の方も習おう。多分魔王様が王妃様に頼めばOKくれると思うし）」

現在、私の中で国語Ⅱ 異世界史Ⅰ 魔法という優先順位ができたわけだが、他に何か、何かないだろうか……。

「姫様、お茶のおかわりはいかがでしょう？」

「あ、ありがとうございます。いただきます。……ん？ 姫様

？」

「どうされました？」

「いかがなさいました？」

さすが姉弟、揃って同時に色っぽく首を傾げるとは。私が乙女ゲーとラノベと漫画大好きなオタクじゃなくて普通の18歳男女なら一発で落ちてる——って、いやいや、それはいい、どうでもいい。今はエロい執事と侍女さんについてはいいんだ。

そうだよ、私姫じゃん。魔王と王妃様の、しかも一人娘……魔王位が世襲制だったら、私今の所王位継承権第1位だよ。立派な王族じゃん。

相当ヤバい事実思い当たり、私は少し青くなった。そうだ、私

王族だ。今まで何だかんだで「魔王」が称号でも悪役でもなくて、本物の王様だったの、忘れかけてたよ。昨日臣下押しかけて来たのにね！ めっちゃ恩恵受けてんのにね！

王というのは、適当に税金で城で生活してりゃいいってもんじゃない。国を文字通り支えて、臣下や民を纏める存在である。当然王の妻や子供達、つまり王族にだって、相応の振る舞いやなんやは求められてくるのだ。それをいくら一般庶民だったからとはいえ、一週間も本来の意味を失念していたなんて……不覚！

「（っ……王族教育！ これ金と時間めっちゃかかるって言っけど、私一人娘だから受けなきゃ駄目じゃね！？ せめて振る舞いとかマナーとか身に付けないと、異世界史でミスるより、魔王様達によっぽど恥ずかしい思いさせるよね！？）」

あああああ気付いて良かった！ 本当良かった！ こういうのって気付かないままズルズル適当にやっていると、大体後で大恥かくことになるって相場決まってるもん！ 危ねえええええ！！

私は大火傷する前に自分で気づけたことに冷や汗をかき、同時に安堵する。よし、これで勉強内容が決まったぞ。国語、異世界史、魔法、王族教育、この4つだ。優先順位は国語Ⅱ異世界史 王族教育＞魔法だ。王族教育は特に絶対必要だと思うが、その前に常識などを叩き込んだ方が良さかもしれないという判断だ。あれだけ焦ってから言うのもなんだが、もし私が思うような王権体制でなかった場合、最悪無駄に終わる可能性もあるからだ。

さて、後はこの旨を魔王夫妻に話して……あ、いや待てよ。今あの人達仕事中だ、邪魔しちゃいけない。それと、もし魔王夫妻から今日の指示があるなら、それを聞いておかないと。

「ヴェロニカさん、ヴォルクスさん、今日って何かしなきゃいけないこととがあります？」

「いいえ、特には」

「陛下と殿下より、王女様のお好きにさせるようにと仰せつかつております。ただし、まだお部屋からは出ないようにとのことです」

成程……ヴォルクスさんの言葉で、どうやら私の両親は放任主義らしいことが分かった。ただ、放任主義と聞けばほつたらかしと思うかもしれないが、あの親馬鹿の両親からこんな放任主義の指示が出ているということは、甘やかしてる響きを含んでいると見て間違いないだろう。好きなことを好きなだけしろと、そういう意味合いだ。

……忘れてた私が言うのもアレだけど、もうちょっと娘の、一国の姫のこと、考えた方が良くないんじゃないだろうか。いや、自分のペースで色々出来るから、都合良いけど。

しかし、両親不在でもこの軟禁生活が続くのはいただけない。何で部屋の外に出してもらえないのかは訊いたけど、まだ心配だからって言われたっけ。

あの時なら外出するとしたら魔王夫妻が絶対貼り付いてきただろうし、危険なんて皆無だったと思うんだけど。従者兼護衛付きでも駄目って、一体何が心配なんだろうか。分からない。城の中を探検とか、追々したいんだけどな……。

「何で出たら駄目かって、聞いてます？」

「いえ、ただ出すなどだけ」

「そうですか……今度また訊いてみよう」

ここでこねても、この二人を困らせるだけだろう。聞き分けのない子供じゃあるまいし、我が儘を言っただけ困らせるのはよくない。部屋の中でも勉強はできるのだ。外に出るのはそれらが一区切りついてからだって構わないし、今どうしても、ってわけでもない。元々

引きこもること自体、苦に感じない方だしね。

「それで姫様、何かなさりたいことでもおありですか？」

「あ、はい。私、勉強したいんですが」

「勉強、ですか？ 具体的にどのような内容でしょうか？」

「まず、基本的な文字の読み書きを。私、言葉は何故か分かんませんが、文字はさっぱりで……」

「分かりました、筆記用具と教材をご用意いたします。他には何かございますか？」

「この世界とか、魔界についてとかも知りたいです。できれば一般常識から全部。他にも知りたいことはあるけど、まずはそれを勉強したいです」

「かしこまりました。では、僭越ながら教師役は私共が務めさせていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか？」

「お願いします」

さて、一週間ぶりに学生しますか。

09（前書き）

お気に入り件数100件突破しました。ありがとうございます！

ヴェロニカさんとヴォルクスさんに勉強がしたいとお願いして数分後、二人の手によって驚くべき手際の良さで勉強に必要な本や筆記用具が揃えられ、早速私は勉強に励むこととなった。今後の勉強のためにも早くに覚えた方が良いということで、まずは国語からである。

「では姫様、準備も整いましたので、早速始めたいと思います。午前中の教師は、僭越ながらこの私、ヴェロニカが担当させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします」

「よろしく願います」

「はい。では、まずこの世界の文字についてからお教えいたします」

一礼し合った後、私とヴェロニカさんは真つ直ぐに互いに向き直る。何事もはじめは大切だ。私は急遽搬入された真新しい書き物机に座り、傍らのヴェロニカさんを見上げる。

ヴェロニカさんは主人に対するメイドさんらしい柔らかで従順な態度を維持しながらも、先程までとは異なる、知性的な眼差しを私に向けていた。服装こそメイドさんらしい質素なワンピースとエプロン、跳ね上げヴェールのカチューシャだが、雰囲気は殆ど教師のそれである。

ただし、彼女は姉のヴィヴィアンさんと同じで恐ろしく肉感的な上、やっぱり良い匂いがするフェロモンむんむんの美女であるため、その……何て言うか、どこかAV的な女教師になってしまっているのは否めない。だがまあ、それは仕方ないだろう。種族柄、この人やっぱりエロいんだもん。

「（スーツ着て眼鏡かけてくれないかなあ）」

悩殺ボディな女淫魔^{サキュバス}の家庭教師か……私思春期の男の子じゃなくて良かった、なんて、私は早々にそんなくだらしないことを考え始めたが、彼女にそれを知る由は無い。ヴェロニカさんは私のいかがわしくなってきた視線を物ともせず、早速授業を始めた。

「この世界……正式名称「表裏世界ミルドレア」においては、全ての言語と文字はミルドレア語、及びミルドレア文字に統一されています。これには人間界と魔界の隔たりはありません。この統一がなされる前までに使用されていた大陸や国、部族、種族ごとの多数の言語や文字文化は今も存在するのですが、共用語として浸透しているミルドレア語とミルドレア文字の普及率が圧倒的ですので、ミルドレア語のみを押さえておけば、まず言語に不自由することはございません」

「あの、質問良いですか？」

「はい、ヨルムンガンド様。何なりと」

「私達が今喋っているのは、ミルドレア語ですか？」

「はい。私共が喋っている言語も、姫様がお話しなさっている言語も、間違い無くミルドレア語です。姫様のミルドレア語は訛りも無く、とても綺麗で完璧なミルドレア語ですわ」

ふむふむ。どうやら、私の標準語の日本語はミルドレア語に翻訳されているらしい。訛りも無いと言うことは、きちんとミルドレア語の標準語で喋っていると見ていいだろう。では、日本語の方言で話した場合と、英語などの外国語で話した場合はどうなるだろうか。ちよつと気になる。

「すみません、今から私が向こうの世界の訛りで喋りますから、それがどう聞こえるか教えて下さい」

「はい、分かりました」

「——こら、うちがしゃべつとる言語の方言の一つで、京ことばちゅう方言どす。一体どない聞こえまつしゃるか？」

私の人間の方の母は、京都出身だったりする。小さい頃に数年京都の方に住んでいたので、普段は普通に標準語を喋っているものの、京都弁自体は習得しているのだ。特殊な単語の訛りは使用していないが、さて、これは一体どう聞こえるだろうか。

「今お話になったのは、キョートベン、というのですか？先程と同じように、綺麗なミルドレア語でしたが」

「そうですか……では次、お願いします」

そう言つて、今度は簡単な英文を喋る。もしかしたら別の言語になったりしないかと思つたが、これもミルドレア語だった。どうやら私が喋つた言語は、その種類や訛りに関係無く、全てミルドレア語の標準語に翻訳されるらしい。

また、逆にヴェロニカさんに他の言語や訛りで喋ってもらつたが、こちらも同様だった。全て同じ、標準語の日本語に聞こえる。方言萌えな自分としてはちよつと残念な気もするが、翻訳機能としては随分と優秀だな。私は自分のチート翻訳に感心しつつヴェロニカさんに礼を言い、説明の続きをお願いした。

「もしご希望であれば、追々魔界特有の言語などをお教えいたしますが、皆様にはまず世界言語であるミルドレア語をお教えいたします。まず、こちらをご覧くださいまし」

そう言つと、ヴェロニカさんは教材を乗せたカートから一枚の大きな紙を取り出した。机に広げられたそれを見れば、何やら文字らしいものがびっしりと書かれているのが分かつた。その文字には規

則性が見られるので、もしかしたら、ミルドレア文字の一覧表なのだろうか。

「これはミルドレア文字の一覧表でございます。ミルドレア文字は「あ行」、つまり母音の記号を母体とし、それに1つ、または2つの記号を付け加えた子音で、「か行」、「さ行」などを1音字ずつ表現いたします」

説明を受けてから改めてじっくりと一覧表を見やる。私はヴェロニカさんに母音の文字「あ行」を教えてもらい、それから隣の子音「か行」を見た。母音は記号一つだけから成っているが、子音は母音をメインに別の記号が合体する形で書かれており、行によって母音の位置は少しずつ違うものの、基本的に母音さえ分かれば、ある程度当て推量が行く文字らしい。

「（……なるほど。つまりこれ、ローマ字と同じ感じの表記なんだ）」

少しの間一覧表を眺めて、私はミルドレア文字をローマ字の親戚と判断することにした。

ローマ字はA^あ(a)、I^い(i)、U^う(u)、E^え(e)、O^お(o)の母音に、「か行」ならK(k)、「さ行」ならS(s)が、Ka^か(ka)、So^そ(so)といった風に、子音としてセットで並べられる。ミルドレア文字はこの母音と子音がセットで並べられるのではなく、母音の記号に子音の記号が寄生するような形で合体しているのだ。

また、平仮名のように大きさを「ゃ」、「ぁ」などの小文字を表しているようで、小文字は大文字の行の隣に、はつきりと大きさを比較できるような形で添えられている。多分、ローマ字と平仮名が結婚すれば、こんな形態の文字になるだろう。

「いかがですか姫様」

「向こうの世界の文字の表記と似てます。覚えやすそうです。ちなみに、文法はどうなってます？」

「文法は特に難しくはございません。ミルドレア文字は、話し言葉の音をそのまま書き表したのになります。「こんにちは」という単語を書く場合、ミルドレア文字でそのまま「こんにちは」と書きます」

「あ、じゃあ割と簡単そうですね」

「それはようございましたわ。では、早速書き取りを始めましょう」

「はい」

ミルドレア語は英語のように小難しく後ろから訳す必要があるわけでもなく、そのまま日本語のような感覚らしい。ただ、唇の動きを見る限りでは、発音は全く異なっているようである。もしかしたら文字の母音とか、私に分かりやすいように翻訳されているのかもしれない。

まあとにかく、チート翻訳機能のおかげで、ミルドレア文字を覚えるのは容易いということは確かだろう。私は羽ペンをインクに浸すと、書き取り用の羊皮紙に拙いミルドレア文字を書き写していた。

羽ペンに羊皮紙……ファンタジーだなあ。シャーペンとノートに比べて、すごい書きにくいけど。平然とこれでレポート書き綴るハ。ーとかハーマ。オニー尊敬する。

「そういえばヴェロニカさん」

「はい、何でしょう姫様」

カリカリとミルドレア文字を書きとる傍ら、私はじつと作業を見守るヴェロニカさんに話しかけた。

「不満なわけでは全くないんですが、ヴェロニカさんとヴォルクスさん、どうして教師役を買って出てくれたんですか？侍女さんも執事さんも、仕事っていっぱいありますよね」

王城の使用人、特に下働き以外は、ある程度教養のある人間でなくてはならない。特に、現王の一人娘に付く使用人ともなれば、家柄や教養は必須項目だろう。しかもヴェロニカさんとヴォルクスさんは護衛を兼ねているので、腕も立つ人の筈だ。そんな文武両道の人ならば、こんな基礎的な国語や常識の教師役を務めるのは容易い。だが、それは使用人としては越権行為に当たるのではないかと思う。何せ私は一国の姫だ。身分こそ恐らく確実に私の方が上になるとはいえ、教師役は私の師に当たる人間なので、そんな役を使用人が務めるのは、まずいんじゃないかと思う。なにせ家庭教師チューターという職業が存在するのだ。申し出に甘えておいてなんだが、その方面の人から怒られるんじゃないだろうか（もともと、私としては、こんなに色っぽいセクシーお姉さんと性的イケメンお兄さんが先生なんて泣いて喜ぶことだけだね！）。

勿論、仕事の妨げになっていないかも心配だったが、私は主にそういう意味でヴェロニカさんに尋ねた。

「それでしたらご安心下さいまし。私共は陛下と殿下より、姫様の身の回りのこと全てをお任せされておりますので」

「全て……ってことは、家庭教師チューターも含まれるということですか？」

「はい。遊び相手も、話し相手も、護衛や勉学の指南まで、姫様が望み得る「全て」をお任せいただいてございます。また、それらには最優先で当たるように、通常業務には携わらなくても良い、と

も仰せつかっておりますわ」

「……万能な上に信頼されてるんですね、二人は」

「お褒めに預かり光栄でございますわ」

そう言つてヴェロニカさんは妖艶な笑みを湛え、綺麗に礼をする。その際、さらりと背中から零れたその長い髪から、まるで蜂蜜のような甘い良い匂いがふわりと漂い、私は少しくらりとした。ヴィヴィアンさんといいヴェロニカさんといい、何故同性からしてもこんなに魅力的なのか……女淫魔^{サキユバス}恐るべし。

「それにしても、姫様はお優しくていらっしやいますね」

「え？」

私はヴェロニカさんの言葉に、きょとんとして返す。一体今の会話のどこでそんな感想を得たのだろうか。

「教師役を買って出たことで、私とヴォルクスが叱責を受けるのではと、そう思つて下さったから、そんなことをお訊きになられたではありませんか？」

「そう……と言えば、そう、ですかね……？」

「ご謙遜を。お仕える方が優しい方で、私はとても嬉しいですよ。それに……そのことに思い至ったことに関しても、主として素晴らしいですわ」

「それはちよつと褒め過ぎですよ」

「いいえ、そんなことはございません。このお気遣いは、私共の仕事や役割などをきちんと把握していなければできないお気遣いです。姫様はお戻りになられて一週間程しか経っていらっしやいますのに、既に把握しておいでだなんて……聡明な方でもございますのね」

「……アリガトウゴザイマス！」

いえ、ただのオタク的趣味知識です。中世ヨーロッパ大好きです。メイドさんも執事も大好きです、はい。

……とは言える筈も無く（そもそも言っても理解を得られそうにない）、私はうつとりと陶醉したような表情のヴェロニカさんに、固い笑顔で誤魔化しを入れた。だがヴェロニカさんは一体何がそこまで嬉しかったのか、そこから堰を切ったように私を褒めるのを止めようとしなかった。

「お優しく聡明しかも容姿も大変愛らしくていらつしやり勉学に励まれる勤勉さも兼ね備えているだなんて姫様はなんて素晴らしいお方でしょう陛下と殿下よりお話をいただいた際は人間としてお育ちの姫様にどう接すれば良いのか不安でしたがそんなものは杞憂でございましたね何故なら姫様は私共使用人にも敬語をお使いになれるほど慎み深くお淑やかで尚且つ大変大人しい方でしたものこれはむしろ不安などより庇護欲が煽られると言いますかとにかく私はすぐに姫様のお心の優しさに感服いたしましたわお着替えをお手伝いいたしました時にこういったお手伝いを気恥ずかしそうになさりながらも私に身を委ねて下さる所がまたなんとも愛らしく恥じらう様は正に花開かんとする蕾のようで――」

「何！？ ヴェロニカさん何があったの！？ 貴方に私はどう見えてるんですか！？ むしろどう私を見てるんです！？」

そのふつくらとした厚めの色つばい唇から、私への賛辞が途切れることなく延々と紡ぎだされていく様子に、私は思わず全力でツツコミを入れた。

ていうかヴェロニカさん、興奮してる？ 頬が凄いピンク色、色つばい。エロい。潤んだ赤い目も熟れた苺みたいにきらきら綺麗に光って、何だか吸い込まれそう。頬に添えられた白い手は、繋いだらどんな感触がするだろう。さらりとした綺麗な黒髪は、一体ど

んな指通りだろうか……触りたい。そんな欲求が溢れてきている。それにさっきから甘い匂いがどんどん強くなってきたて、何か頭がぼーっとするっていうか、もうヴェロニカさんしか目に入らないっていうか……とにかくヴェロニカさんがすっごく綺麗で色っぽくて私は吸い寄せられるようにその唇に――

「王女様、一体何をなさってらっしゃるんですか！　しつかりなさいまし！」

「！？」

強く肩を揺さぶられ、私はハツとして動きを止めた。目の前には凄い焦った顔のヴォルクスさんが居て、酷く慌てていた。

「……あれ？」

……一体、私は何をしていた？　思い出せない。とりあえず自分の今の状態を見てみよう。

まず居る場所。私の部屋の床、ヴェロニカさんの上。……床？　何で？　私机に居た筈じゃ……

「……え！？」

ちよ、待て！　ヴェロニカさんの上！？　何で！？　何で私ヴェロニカさんに跨ってんの！？　まさか私ヴェロニカさんを押し倒した！？　私は慌ててヴェロニカさんの上から退いた。

「あら……止めてしまわれますの？　姫様」

「ヴェロニカ姉さん！　……申し訳ございません王女様。どうやら王女様は、姉の催淫フェロモンで一時的に魅了チャームにかかっていたようです」

「催淫って……え、魅了？」
チャーム

「はい……淫魔特有の能力です。私共淫魔は精を奪うため、体から強力な催淫フェロモンを放出し、相手を自分の虜にすることができのです」

それは分かる。淫魔はやった相手から精力を奪う種族だから、そういう能力を持っていてもおかしくない。むしろ持っている筈だ。ただここで疑問なのは、何故異性から精を奪うために使われる魅了^ムが、同性の私に効いているのかということである。

「大変言いにくいのですが……姉はその、女淫魔^{サキユバス}としては異例の特殊な性癖の持ち主でして……」

「……もしかして」

「はい。私は女性に性的魅力を感じるので、私の魅了^{チャーム}は女性に効く魅了^ムなのです」

予想外——ッ！！！
サキユバス これ予想外の展開ですよ！？ まさかこのお色気むんむん女淫魔のメイドさんが、百合担当だったなんて！
！ キャラ的には大変美味しいですごちそうさまですだけど私は当事者になりたくないよ！ 私ノーマルだよ！？ 女の子とはキャッキャウフフしてるだけでいいんです！

「……はっ、まさか」

「仰りたいことは分かりますが、私は普通です王女様。女性が好きです。ヴィヴィアンも普通です」

「良かった……ヴィヴィアンさんとヴォルクスさんはノーマルか……」

もしヴィヴィアンさんまで私をそういう目で見たら、ちょっと悪寒が走る。いや、ヴィヴィアンさん自体は嫌いになったりしない

けど。あとヴォルクスさんの方までそうだと、また見る目が変わりそうだったよ。

いや、ヴェロニカさんも警戒心持っただけで、特に嫌いになったりもしないけど。お色気お姉さん大好き。むしろ襲われないなら存分にお近づきになりたい。

「っ姉さん！ 私が紅茶を淹れ直している間に、一体何をしてるんですか！ 王女様に発情するなんて……！！」

「ヴォルクス！ 姫様の魅力が貴方には分からないの！？ それでも男淫魔インキュバス！？」

「そんなことは言ってます！ それより姉さん、王女様を汚すなんて何を考えてるんですか！ 私達は使用人ですよ！？」

「そこがいいのよ馬鹿ね！ 許されないから燃え上がるのよ！」
「……………」

……書き取り、続きやろう。

私は背後で言い争いを続ける二人を、とりあえずそっとしておくことにした。

「王女様、誠に申し訳ございませんでした！」

「大変な失礼を……」

ヴェロニカさんとのまさかの百合イベントの後、いつの間にか姉弟の口論のBGMが途切れているなあと自習の書き取り中に思って振り向くと、二人が殆ど体を二つ折りにしたような体勢で、そりゃあもう 深々と頭を下げていたため、私はぎよっとしてペンを取り落した。

「いくら魔族が自身の感情や欲求を抑えるのが難しい種族だとしても、ヨルムンガンド様は王女！ このようなことは決して許されるものではございません！」

「ヴォルクスの言う通りです。つい右も左も分からない雛鳥のような姫様を1から開発するという禁断の主従愛に欲情が止まらなくなってしまうとは言え、私ったら大変なことをしてかしてしまつて……」

「本来でしたら体中の皮膚を剥いだから聖水に全身を沈め肉という肉が全て爛れるような拷問に掛けられたとしても仕方がないことです。しかし、これでも姉はメイド長を務めるほどに優秀な人材です！ すぐに欲情して何人ものメイドを喰ってしまうようなどうしようもない色狂いのある意味どんな淫魔より淫魔らしい女色サキユの女淫魔バスですが、仕事ぶりは素晴らしいのです！」

「未だに姫様が押し掛かった時の重みと感触に頭がどうにかなくなつてしまひそうですが、猛省しております。洗顔の際に触れたお肌の滑らかさとか、お召し換えの際に見た細い肢体ですとか、髪を梳いた時の香りですとか、思い出すだけで芯から熱くなってまいりますわが、必ず抑えますわ！」

「王女様にお仕えすることとなってまだ半日程しか経っておりませんが、すぐに王女様も姉の価値にお気付きになることをお約束いたします！　ですからどうか！　どうか今回はお慈悲を賜りたく！　姉を処刑や拷問にかけないでいただきたいのです！」

「次回からは必ず同意を取ってから事に及びます……ですからどうか、お許し下さいまし！」

……あれ？　これ、謝ってるんだよね？　私今、さっきの百合イベントのことについて、二人から謝られてるよね？　謝ってるはずなのに、ヴェロニカさん全然反省してなくね？　まだむらむらしてるって言っちゃったし、今次から同意でやるって宣言したよね？　何で当の本人より、ヴォルクスさんからの謝罪の方がちゃんとしてんの？　ヴェロニカさんともねえキャラだな！

私はドン引きの意味で唇の端をひくひくと痙攣させ、二人を見やる。

二人共頭が床に付くんじゃないかっていうくらい頭を深くと下げているので、顔は見えない。だが、何となくヴォルクスさんは必死に姉を庇う真摯な表情、ヴェロニカさんは別の意味で真面目な顔をしているであろうことが、何となく分かった。

……これがギャグ漫画なら、今思いつきヴェロニカさんに突っ込めるんだろ。超真面目に謝ってるヴォルクスさんの手前、そういうことは雰囲気的にできないけど。

「まあ……未遂だし……別に、お咎めとかは無い方向で……」

「っ真でございますか!？」

「まあ……姫様！」

ちょっと引いただけで嫌いになったわけでもないし、怒ってるわけじゃないし……何より、ヴェロニカさんより遥かに真面目に謝るヴォルクスさんが、何か可哀想だ。きつと苦労してるんだろ……

そう思つて無罪放免の旨を伝えると、二人はバツと顔を上げ、私を凝視した。

……あれ？ 二人共、何か目キラッキラしてね？ いや、ヴェロニカさんはどっちゃかって言うてギラッギラしてるけど……。

「今まで姉のしでかしたことで、どんなに軽くても夜伽の相手を命じられたのに……無罪、放免だなんて……」

待て。ヴェロニカさん、そんなに何かしてきたのか？ ていうか誰だよ夜伽命じた奴。パワハラだろ。しかもどっちに命令されたのか気になるぞ。

「同意の上でしたらシても構わないと仰るのですね……」

そこまで言つた記憶無えよ。これから先、何が何でも同意取られそうで怖い。くそ、今更撤回できねえ。

「このヴォルクス、王女様の御心の広さに感動致しました！ これからも姉共々、誠心誠意お仕えさせていただきます！」

「絶対に同意を取れるよう、精進致しますわ！」

「……………はい」

無駄に好感度は上がったけど、精神的な何かはこっそり減つた気がする。

「では王女様、準備はよろしいでしょうか？ 午後の教師は僭越ながらこの私、ヴォルクスが担当させていただきます」

「よろしく願います」

嫌な好感度上昇イベントの後、昼食を終えた私は午前中と同じ、ただ教師だけが変わった図で一礼し合い、授業を始めた。

なお、ヴェロニカさんは反省のため、ヴォルクスさんに言われて厨房で銀食器磨きの罰を実行中のため、ここには居ない。やっぱり嫌いではないんだけど、この場に彼女が居ないことにちょっとだけ安心したのは秘密だ。

「それで講義の内容ですが……そうですね。王女様、何かお知りになりたいことはございますか？」

「……じゃあ、魔族のことを教えて下さい」

「かしこまりました。——我々魔界に暮らす民の内、その形態が人型で、更に一定以上の知能を持つ存在を魔族、それ以外の存在を魔物と言います。こうして分類はされるものの、基本的に魔物も魔族も、黒の精霊の加護を受けた魂を持つ同胞です。精霊のことは、またいずれお話し致しましょう」

ふむ、どうやら魔族そのものは、大体ファンタジー的な王道を押さえた設定らしい。何となく同胞というニュアンス的に、魔物と魔族は隷属関係とかそういうのではなく、仲間意識があるような感じがする。部下と上司のようなものだろうか。

私が羊皮紙に日本語でノートを取るのを見守りつつ、ヴォルクスさんはタイミングを見計らい、丁度キリの良い所で話を再開してくれる。出会ってから節々に見受けられるのだが、ヴォルクスさんは気遣い上手だ。その様子は、きっと執事としてとても優秀なんだろうと窺わせた。

「我々魔界の民は、他種族に比べるとかなり好戦的で、実力至上主義な種です。基本的に気に喰わない相手は殺しますし、強者による支配に重きと効率を置きます。少々短絡的で極論に走るところも

ありますね。王女様にも覚えはございませんか？」

「……ありますね」

それは、私が向こうで「おかしい」と言われた理由の一つだ。私はどうにも血の気が多く、クラスに一人は居る男子とばかり遊ぶ女の子で、中学に上がるまでは拳で物を言わせていたタイプだった。中学に上がってから、女ということや社会的風潮などもあって、暴力行為が暗黙のタブーとなったものの、内心気に喰わない相手には常に「死ね」と思っていた（たまに実際言った）。無視するだとか回りくどく嫌味を言うだとかができなくて、自分の世界から抹消してやりたいと常々思っていたのである。

また、民主主義な日本の政治体系に対しても、くるくると首相が変わったりするのを目の当たりにして、興味関心が向かないながらも、なんて阿呆なことをしているのだろうと思つたものだ。全員の意見を聞いて云々と言っているくせに、結局主張を誰も譲らず、枠は限られているのに、無理矢理全てを生かそうとするから失敗するのだ。それなら、強い発言権を持つ者が全て支配した方が余程早いではないか、とも。

うん……私、やっぱり根は純粹な魔族なんだな。改めて振り返ると、自分がいかに社会に溶け込めていなかったか分かるよ。後悔したことは無いけど。

「人間や他の種族はそんな我々を野蛮と言いますし……先程の姉の件でお分かりかと思いますが、我々は知性や理性以上に感情に忠実に動くので、実際そう言われても仕方がないのかもしれない。しかし逆を言えば、それは純粹さの表れであると私は思うのです」

「純粹さ？」

「はい。我々は正直に言って、難しいことはよく分かりません。面倒ならば消せばいい、障害があるならそれごと消してしまえばいい、その後で問題が起きると言うならそれをも消してしまえばいい

と思い、その通りに実行するからです。ですがだからこそ、一番単純で純粋なものを持っていると、そう思えるのです」

「んー……何となく分かります」

単純というのは、言い換えれば素直ということだ。分かりやすいと言えばいいか。ヴォルクスさんの言う純粋さとは、この素直さを指すものだろう。

好きなものは好き。嫌いなものは嫌い。それを包み隠すのが人間で、それができないのが魔族……魔界の民なのだろう。

単純明快にして純粹無垢。それには、ある種の爽快感すら感じられた。

……まあ、さっきのヴェロニカさんのように、身の危険も同時に感じるが。

「それに、我々は実力至上主義で自己中心的な我が儘かもしれないませんが、そこにはそれなりにルール……いえ、法則とも言えるものが存在するのですよ」

「法則、ですか？」

「はい。強い者は、弱い者を支配する権利を持ちます。人間ですと、半分以上はそこで弱い者を虐げ始めますが、我々は違います。我々はほぼ確実に、支配する相手に愛情を抱きます」

「え？ 愛情？」

「ええ、愛情です。我々は残念ながらこの通りの気性ですので、他種族は非常に毛嫌いし、我々もまた他種族を嫌います。まあ、これは向こうが嫌うからこちらも、という部分が多いのですが……その分、魔界の民は他種族よりも、同族の結束が強いのです。同じ魔界の民というだけで親近感を抱きますし、ある程度は助け合います。同族に好意を持ちやすい、と言うのが適切でしょうか。それは支配関係においても適用され、支配する強者は、支配される弱者を、一種の家族と見做します」

「家族」

「ええ、家族です。一家の長になったようなものですね」

まあ確かに、相手を支配すると言うことは、そいつを私物化するようなもので、私の性的に考えても、懷に抱えたものは大切にするといい考えは分かる。私物化したのが生き物であるなら、家族愛のようなものを抱くのも納得だ。私が身の危険を感じてもヴェロニカさんを嫌わない、嫌えないのも、彼女が「私付きの侍女」という一種の「私のもの」であるせいだろう。

自分のものはしっかりキープ、手を出す奴は許さない……子供のようになんて我が儘、当たり前な感情だろう。成程、確かに感情的だ。

「我々魔界の民はその気性から考えても意外なことに、愛情深いのです。他種族へ向けない分の感情が、その分同族に向くのです。支配対象を愛し、支配される者も、殆どが支配する者を慕います。まあ勿論、弱ければ簡単に立場が逆転されますが、この慕い慕われの部分は変わりません」

「支配者階級から引きずり下ろされて、不満とかないんですか？」

「不満など持とうものなら、殺されますからね。弱かったから下剋上されるのですから、仕方がないでしょう。弱いのがいけないのですから」

「ああ、それもそうですね」

……ん？ 何か人としては変な感じだったような。あ、私魔族だからいいのか。

しかしこれ、何か強い奴が弱い奴に「愛さなきゃ殺す」って言うようなものだよね。ヤンデレか、種族単位でヤンデレなのか。パネエ。だがヤンデレ萌えも持ち合わせる身としては、何だか魔物・魔族に対して好感度が上がった。まあ、あんまりハードなヤンデレ

の対象になるのは勘弁してほしいけど。

「それから、もう既に魔王陛下と王妃殿下と接されてお分かり頂けているかと思いますが、実際に血を分けた親族に関しては、我々はかなり甘くなります。友人に対しても大変甘いです。特に伴侶や恋人となれば、それはもう甘くなります。まあ勿論、愛情表現には個人差がありますが」

……成程。私の両親の親馬鹿は、魔界的に考えて標準仕様だったわけか。それに、百合イベントの件でのヴォルクスさんの当人以上の謝罪祭りも。

「ヴォルクスさん、ヴェロニカさんが好きなんですネ」

ヴェロニカさんに比べて理性的らしいヴォルクスさんは、主人に襲い受けプレイ仕掛けちゃうような姉にどう見ても苦勞させられていると思うのだが、それでも（多少貶していたが）必死に庇っていたのを見ると、本当に魔族は愛情深いのだなと思う。

「……あれでなかなか、優しい姉なのです」

「ああ、優しいというのは分かります」

無駄に色っぽい溜息と共に吐き出される言葉に、私は同意した。

ヴェロニカさん、洗顔の時も手つきがとっても優しくかったし、着替えの時もきつくはないかとよく訊いてくれて、髪を梳く時もかなり丁寧だったから（まさかその時からああいう目で見られていたとは思わなかったけど、まあ私もちよくちよくいかがわしい目で見えてたし……）。

シスコンブラコンもデフォルト、か……うん。何か魔族とか魔物って、こうして聞くと随分可愛いな。

「私共姉弟は、1番上のヴィヴィアンが「普通」の仮面を被っただけの被虐思考な完全奴隷体質、2番目のヴェロニカが女性専門の自由奔放な色狂いなもので、いつも3番目の私が二人を引き留めたり後始末をしたりしてきました。ヴィヴィアンがあんまりにも変態趣味が極まったの人間の奴隷になると言い出した時は必死で説得し、ヴェロニカが襲った女性の親兄弟に死ぬほど頭を下げ……」

「……………」

「ヴィヴィアンが自慰で聖水プレイをしてうつかり目に入ってしまったかけた時には、なんとか魔法で聖水を取り除きましたし、ヴェロニカが男淫魔インキュバスになりたいから私の一物を寄越せと言って刃物片手に迫って来た時は死ぬ気で逃げて……」

「……………」

「……ですが、二人共私が困っていれば手を差し伸べてくれますし、悩みがあれば聞いてくれるのです。……10回に3回くらいは」「ねえ、それどこが優しいんですか？ ヴォルクスさん、優しさの定義間違ってますん？」

しみじみと語るヴォルクスさんに、私はさすがに突っ込んだ。いや、もつと突っ込み所はあったけど（特にヴィヴィアンさんに対しての衝撃の事実とか）、それ以上にヴォルクスさん自身に突っ込まないといけないと思った。

だって不憫だ。不憫過ぎる。これ苦勞人っていうか、ただの可哀想な人じゃないか。しかもそれでも姉が好きだなんて、本当に魔族って家族愛強い。でも報われてない、報われてないよヴォルクスさん！ 一方通行じゃん！

「ヴォルクスさん、何か辛いことがあったらすぐ言って下さい。相談くらいいつでも乗りますから……………」

「そんな恐れ多い……王女様、私は一介の執事です。友人のよう

に扱われるのは……」

「私はこれでも貴方の主人ですから！ 執事の一人や二人を快適に過ごさせるくらいできます！ ……多分」

駄目だ、物凄い何とかしてあげたい。私まだろくにここのこととか知らないけど、せめてその気概だけでも伝えたいと思い、私は力説した。話を聞くくらいだったらいつでもするよ！ 不憫過ぎるよヴォルクスさん！

「お、王女様……！！」

ヴォルクスさんは私の言葉に何やら感じ入ったのか、真っ赤な目を潤ませて涙目で私の手を取った。

「ありがとうございます！ ありがとうございます王女様！ 私、一生お仕え致します！！」

「うん、うん」

後から思えば私から恋愛フラグを立ててしまったことになるが、不憫過ぎるヴォルクスさんを思えば、別に何でもないと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8857x/>

1 or 0

2011年11月15日01時02分発行